

平成26年度

# 読書会感想文

市立竹原書院図書館



◆ 4月課題本 ◆

# 『十二単衣を着た悪魔』

内館牧子／著 幻冬舎

『源氏物語』の原文から遠ざかって久しいが、現代語訳や新訳などが手近に出版されているので、なんとなく知っているような錯覚に安心している。この例会で、かつて『桃尻語訳枕草子』（橋本 治 河出書房新社）を読んだことがある。桃尻語(?)で現代風に訳すと、清少納言は宮中勤めのキャリアウーマンだということになって、書いた清女もさぞ驚くことだろう。

今回、紫式部がこの作品を読んだら、「こんな弘徽殿の女御など、はしたない」と冷たくあしらうのではないだろうか。なにしろ、紫式部は「賢げにふるまって漢字など書き散らす女」（清少納言のことだが）は生意気だと嫌っているのだ。才気煥発な女性だと言われるより、漢詩文の才を内に隠している方が好みの方だから、内館流弘徽殿の女御が実在して、定子、彰子とならんだら、紫式部は、どんな“悪口”を書き連ねるだろうかと思像するのも楽しかった。

それにしても、弘徽殿の女御をコードにすれば、『源氏物語』も変わるものだ。橋本 治氏の『窯変 源氏物語』（中公文庫）は光源氏をコードとして読み替えられている。コードを変えると、窯変したり異聞になったりして思いも寄らぬ話に仕立てられる。もっとも、橋本氏の作品は、あまり『源氏物語』原文から離れていないので、弘徽殿の女御は、やはり脇役のままだが。

この作品では“悪魔”に仕立てられた弘徽殿の女御は脇役ではない。もともと彼女は、原文にはさほど登場していない。つまり、内館氏が自由に筆を走らせる余地が十分有り、この人の人間観を体現して大いに語る事が出来る。その相手が、高麗の陰陽師と名乗る現代からワープした青年という設定だから、小説家というのは何とおもしろいことができるのかとワクワクしてしまう。原文に出てくる「そのころ高麗人参れる中にかしこき相人あり」の部分から着想を得たのかと思うが、それを主人公にしているのもさすがである。

女人としての弘徽殿の女御、そして光り輝く弟と比べられる凡庸な兄。

登場する人数を減らしてすっきりとさせ、正室であり母親である弘徽殿の女御の心理を描き、弟の光源氏と比べられる兄の皇太子を書いていく。

原文の『源氏物語』を忘れそうな雰囲気だ。この『異聞』の作者は弘徽殿の女御を“悪魔”と名付けながら、称讃さえ含ませているようだ。〈弘徽殿の女御は生まれるのが1000年早す

きた。)つまり現代の価値観で書くことができる女性像としている。通常は、底意地が悪くトゲトゲしい女だと読める原文解釈を、(自分の意見を持ち、冷静な状況判断が出来る女性)と読み替えたわけだ。

この作品の題名を見たとき、「プラダを着た悪魔」というアメリカ映画の題名を思い出した。あの“悪魔”も伝統的な“悪魔”ではないようだ。この種の“悪魔”は、現代人を納得させる魅力がなければ似合わない。

古典の『源氏物語』は縁遠くても、『源氏物語』の筋を借りたこの作品は読みやすく、人物が身近に感じられ躍動している。出版した年に7刷まで出ているのも、頷けることだ。

例会でのまず最初の感想語は「おもしろかったあ」が殆どだったが、「おもしろくなかった」という感想も複数あって、大いに沸いた。

この小説のおもしろさの評価は、その人の『源氏物語』原典への入れ込み具合が影響すると見た。『源氏物語』の時代と粗筋だけを借景とし、現代を描いた小説だと読めばおもしろいと言えるし、『源氏物語』をここまで改変するのは不満だとする人はおもしろくないという意見になるようだ。

読み手の『源氏物語』についての一般的知識を利用しては居るが、現代小説だと読むのが無難なところではないだろうか。



とうとう就職先が決まらなかった若者が、なぜか源氏物語という小説の中に タイムスリップし弘徽殿女御と出会い、物語の中で幸せに生きていくというストーリー。

面白くて、一気に読み進みながら、最後は この若者はどうなるの？ 内館牧子さんはこの結末をどう締めくくるの？と、気になって仕方がなかった。

現代の若者兄弟を、平安時代の光源氏兄弟と対比させるところが面白い。人並み以上なのに、コンプレックスをもって生きる人が描かれている。勉強もスポーツも容姿も優れている弟に対して、コンプレックスをもって生きてきた若者と、光源氏の兄が、神のように何もかも優れている弟の光源氏に対して、やはりコンプレックスを抱いて生きていく様を対比させている。

文中に「ライバルにならない相手には優しい」とか「いじめられるのも 輪の中にいるから。輪の外に置かれていることの寂しさ」「他人にどう扱われてきたかは大人になっても消えない」などの言葉がでてくるが、内館さんの思いなのか、心に残った。

なぜ、この若者が親兄弟を捨てても平安時代で生きる方を選んだのか、不思議だった。彼は、優しくされ、いたわられる様な人生より、人から 頼られ、人の役にたてる人生を選んだのだ。人は誰でも、頼りにされたり 役に立っていると感ずることで、自己充実感が得られるのだと思う。

また弘徽殿の女御は、夫に見向きもされなくなった寂しい女性に見えるが、その強さ、逞しさに、惹かれる。何度も人の意見に「甘い。」と言い放ち、裏の裏まで考えて行動する人。

「運の悪さに負けない為には、いろんな方向からものを考え 実行しなくてはならない」と言い放ち、毒を飲める人なのだ。男に頼る生き方でなく、自分で冷静に判断し、誰にも相談することなく、ぐいぐい独断で決める。

気になっていたこの物語の最後の結末は、実にお見事というしかない。内館さん、さすが。なるほど、と、胸がすーっとした。



弘徽殿は桐壺帝の愛が自分に向かない寂しさから春宮を溺愛し、何を言われようと毅然とし、政治力、野心があり、強く生きた人

自分を保つためには、そうせざるを得なかったのかも。心からは憎めないような気がした。

雷が意識を失っていた20分間源氏の世界で26年現実を交えた話でとてもおもしろかった。



内館牧子さんの本は初めて読んだが、面白い考えの物語になっている。若い人が手にとって読みたくなる本ではないでしょうか。



タイトルを見て「やった～面白いぞ～」まして、作家が内館牧子。こんな源氏物語の読み方があるものか、ましてや主人公は「弘毅殿の女御」。肩のこらない源氏の世界に浸かってみるもの一興かと思いました。



まさに「異聞」です。

そして、「おもしろさ」や「あそび」のある「内館ものがたり」でした。

「この本おもしろかった？ おもしろくなかった？」講師の先生からの問いかけでした。参加者の八割は、「おもしろかった。」の感想でしたが、「おもしろくなかった。」の感想もありました。いろいろな捉え方を語り合えることが、読書会のおもしろさだと考えます。今回の課題本は、二つの意見に分かれました。

物語は、現実の世界から源氏物語の世界へワープし、再び現実の世界へ戻りワープして別の時間と空間での経験から新しい生き方を見つけるというものです。そこには、「悪魔」と呼ばれる女性の存在があったからこそできたことだと思います。

平安時代の雅な世界を描いた源氏物語ですが、その中で描かれる女性は、常に受け身であり待っただけの「女」として描かれています。しかし、この物語に登場する弘徽殿女御は「静かで、物言わぬ可愛い女性」ではありません。実際の源氏物語の中ではあまりその姿を現していません。しかし、54帖から成るとされている源氏物語も、60帖という説もあります。

(どこかの蔵に静かに眠っているかもしれません。)  
「60」の数字にも内館流の仕掛けがある  
と思えます。

主人公と目される「雷(らい)」という青年は59社の就職試験に失敗します。最後の会社は、親の後ろ盾も利用したものでした。しかし、最後の望みも叶いませんでした。正社員となれなかったことで彼女からも付き合いを断られる、さえない第一子の雷と帝の第一子であり弘徽殿女御の子は、よく似ています。雷の弟は名前を「水(すい)」といい、頭脳明晰で“いい男”です。帝の二宮は帝の寵愛を一身にした桐壺更衣の御子で「光源氏」です。なにかと「さえない雷(らい)」が源氏物語の中にワープしてしまいます。この源氏物語の世界では、さえない雷(らい)が、高麗から来た陰陽師として大切に扱われます。また、発言力や能力があるために「可愛い」とはけして評されない弘徽殿女御は、正妃でありながら帝からは寵愛されることもありません。そんな彼女は、その時代の待つだけの女性、男性に依存する女性をバツサリと批判しています。その批判は、帝まで及びます。まさに御簾の影で、白くおしろいを塗り、10キログラムの重さがあろうかと思える十二単衣を着て、ただ待つだけの女性ではありません。

次のように帝を例に

「桐壺の帝はご立派なお力であられるのだが、怖い女より、可愛くて手頃な女に走った。それは怖い女を『女』として見るほどの、高みには達していない男だという証だ」

と、男性批判をしています。平安時代の女とは異なる考えをしているのが、まさに弘徽殿女御です。のちには、弘徽殿太后と呼ばれるように政治にも意見を言うようになりました。

男に依存して生きることには賛成しかねる内館さんは、弘徽殿女御の行動や言動を通して自分の女としての生き方を語っています。『源氏物語』や『プラダを着た悪魔』をベースに、「平安時代」と「現代」を比較(類比も対比も)して言いたい放題の「内館物語」。それは「悪魔」の言動そのものでしょう。でも、「悪魔」と呼ばれる女性はいずれの社会や時代にも居ると思われますね。



もし源氏物語の時代にタイムスリップしたら、という本でした。登場人物も階級も、源氏物語もしらない私は、一緒にタイムスリップして、感情や、自然の中の生活を共有できました。

プライドとか能力、恋愛のかけひきを知って、その時代を毅然と精一杯生きている登場人物と出会えて、人間のおもしろさを感じました。



22歳の主人公、雷(らい)は、自分を認めてくれない現代社会から平安時代の源氏物語の世界にタイムスリップする。よくある物語の設定なのだが、いかに読ませるか、そこは作家の腕のみせどころ。その点、内館氏は裏切らない。源氏物語という素材の中に、現代社会の間

題が織り込まれ、若者雷の思考や弘徽殿女御、光源氏などの登場人物の魅力に引き込まれ、ぐいぐい読まされてしまった。

特に私は雷(平安時代では雷鳴)の平安時代と現代の生活の違いを比べているところに共感した。

「あっちの世は深夜でもネオンやコンビニ、ガソリンスタンドからの灯で、まったく闇がなかった。だから、月がどんなに明るいか、灯がどんなに有り難いかもわからなかった」「第一、月になんか関心がなかった。それが今、月が出ているというだけで、心が弾む」

私も東京から瀬戸内海の島に移り住んだ時、夜の暗さと静けさに驚いた。暗闇が怖かった。でもそれが「夜」。当たり前だと感じる。だから最近では逆に東京に帰省すると、夜の明るさに違和感がある。なぜ夜中なのにこんなに明るくて、人が外を歩いているのか?明るくしていた方が防犯にはいいのかもしれないけど、明るいから人が外をうろつくのではないか、とも思ってしまう。暗闇は怖いから、人は用もなく夜、外へは出ない。

また雷はこんなことも言う。秋になって「昔の人は、こんなにすごい虫の音を聞いていたのか。いつ頃から日本は自然破壊をしたのだろう。俺はあっちの世界では、『自然破壊』なんて考えたこともなかったし、便利になるならしゃあねえじゃんと思っていたが、虫の音のすごさを聞くと、破壊しすぎた気がしてくる」「一日二十四時間には『六季』があると気づいた。『六季』は俺が作った言葉だが、『夜明け』『朝』『昼』『夕方』『夜』『夜中』だ。あっちでは二十四時間明るいし、東京では朝に鳥が鳴くこともない。あっちでは夏も冬もエアコンで同じに調節でき、朝も夜も電気で同じに調節できる。だが、こっちは違う。六季はそれぞれがくっきりと違う。夕方から夜になり、深夜へと進む。空は深夜二時から三時が一番暗い。そして夜明けが来て、やがて陽が高く昇る。そのうち夕焼けになり・・・という違いを見ていると、あまりの美しさに泣きそうになる」「こっちはテレビもネットもなく、雑誌も新聞もない。だから、色んなことを考える。色んなことを感じる。そんな自分や、そんな生活に俺は満たされている」

「女御に挨拶する春宮を見ながら、日本人はいつからあんなに幼稚で、軽薄で、騒々しくなってしまったのかと思っていた。千年前まではこうだったし、戦中戦後の映像などを見ると、やはり今とは全然違う。たぶん『何でもアリ』という風潮が日本人を壊した原因のひとつだろう。『何でもアリ』とは、すべてに価値を見出すことなのだと、何かで読んだ。冗談じゃない。『何でもアリ』でも、俺のように外される人間がいる。『なんでもアリ』と言いながら、俺のように価値を見てももらえない人間が山になっている。だが、俺よりマシなヤツらにとって『何でもアリ』ほどラクなことはない。何でも正しいとなれば、ゆるみ切る。日本はそれだ」

就職試験に落ち、優秀な弟を持つ劣等感の塊、雷の、率直な現代日本への疑問・批判。気がつかなかった、生活の大切さ、日本の美しさへの気づき。時に、痛いところを突いてるなあと思う。

そして周囲に必要とされる環境の中で、必死に生きようとするのが、雷自身を変えていく様は、本当に心地よい。

最後のほうに、「想い供養」という言葉が出てくる。突然大切な人を失い、ずっと思い悩んできた雷(雷鳴)に向けて、光源氏が放った言葉だ。光自身も多くの人を失いながら生きてきており、それらの死をどのように自分の中で折り合いをつけるか、悩み続けていた。

「雷鳴、私は『想い供養』というものがあると思っている」

「想い供養？」

「ああ、故人のことをね、私の方から想うんだ。亡くなった人の方から現れるのではなく、私の方から想うんだ。何気ない暮らしの中で、私の方から思い出す。できるだけ何回も。それが何よりの供養になるのではないかと気づいてね」

考えてみれば、俺は思い出さないように必死だった。それは俺自身が楽になりたいためであり・・・(中略)

「しかし、あまりの悲しみに、思い出さないように頑張る人もあろうと思います。想うだけで気が変になりそうということです」(中略)

「その通りだね。だけど、突然甦えるというのは、きっと、泣いてくれ、思い出してくれと訴えているのだと思うんだ」

この本が出版されたのが2012年5月。東日本大震災での多くの人の苦しみを意識して書かれたような気がしてならない。

◆ 5月課題本 ◆  
『八月の光』  
朽木洋／著 偕成社

今年は今回から、図書館の司書さんがテキストを選定され、読書会に出席される。画期的なことだと思う。このテキストは児童文学の分類ではあるけれど、大人にも出会って欲しいという意図をもたれたのは、たくさんの本に出会っておられるからに違いない。

「8月」と「光」が重なれば、ああ広島原爆のことだと推測できるのが悲しい。そして、この作品もまさにそうだった。あれから67年が過ぎた2012年の出版であることが、さらにこの重大さを考えさせる。

1945年の朝8時15分は、一瞬だった。その一瞬が、どれほどの大きさに広がっていったか、どれほど苦しい長い時間として続いているか、その果てが想像もできない。

政治的には、原爆症認定という形で決着を付けようとしているが、広島県に暮らしていれば、そのような線を引くことの出来ない影響を身近にいくつも見ている。しかし、だんだん記憶が薄れていく。薄れると同時に 原爆被災者は一つの塊のようにみなされ、そこに一つ一つ人生があったのだということも薄れていく。まるで学術用語のように使われるその言葉に対抗するように、個人の姿を映しているのがこの作品だと思う。「個」をないがしろにして、全体を掴まれてはたまらないという被爆2世の作者の主張を感じる。

「光」は、良きものを喩える。闇を打ち破って照らし、冷たいものに温度を与える。だから人類の祖先は、太陽を拝んだ。光と熱の源だからだ。

その太陽を、自分らの手のうちに得たいと願った研究者達は、1945年、人間の意志で太陽の光と熱を再現することに成功し、8月6日・9日、ヒロシマとナガサキでどんな威力があるかを証明した。それからますます研究が進み、いまや、科学者もコントロールできないほどのものになった。

8月6日、太陽として拝んできたはずの「光」が、良きものではなくなった。それは「光」のせいではない。人間の欲望のせいだ。たとえ70年過ぎていても、その時子どもであっても、私も、「光」を貶めた人類の一人であると自覚する。

さて、どうすればよいのか。

〈あなたには、どうすることもできなかった〉

〈だれにも、どうすることもできませんでした〉

そう修道士は言う。

あの日、光に打たれて死んだ人と助かった人があった。その峻別の意味が見いだせないあの日の記憶を、忘れてはいけないとこの本は書かれたのだろう。

今、自分たちの得ている情報の正確さを疑う。東北は復興しているとニュースは伝える。しかし、東北の復興を語る中に、福島の人たちは殆どいないと現地の人が言われた。

「私たちに忘れないでください」

そのことが大事なのだと、あらためて思う。8月の光も、東北地方の苦しみも、過去の記憶としてではなく、私の記憶として繰り返し新しくしていきたい。



### ～立ち止まり 考える時は いま～

今月の読書会から、課題本は、図書館のみなさんによって選書されたものです。おすすめされることになりました。

今月の課題本『八月の光』をなぜ選んだのか。書籍にかかわることや、課題本から繋がる本についてなど、選書した司書さんが、ブックトークをされました。はじめての試みでした。(トップバッターの緊張感を十分味合われたことと思います。ご苦労様でした。)

ブックトークを聴きながら自分の思いを整理することが出来ました。

あの「八月」の朝、一瞬にして七万の人々の命がうばわれ、その年の終わりまでに十万人を超える人々が亡くなった。そして六十年以上を経た今も後遺症に苦しんでいる人々が、二度と帰らぬものを待ち続けるひとがいることを三篇の話が伝えてくれた。

私の身近にも旧制広島一中で被爆した叔父がいます。『水の緘黙』の主人公のように生き残った者の「苦」を抱え、けしてあの日を語りませんでした。本当に緘黙でした。十三、四の少年がどのような修羅を体験したのかは、緘黙を続けたことで思うしかありません。語らぬままに逝ってしまいましたが、語らぬことで語っていたのだと。

1945年8月の「光」は、「命」を傷つけただけでなく光のもつイメージに、人間の欲望が傷をつけた。そして、現在も人間の欲望が渦巻いている。今を生きる一人としてこの「物語」を語り継いでいかなければならない。今だからこそ、「立ち止まること」そして「考えること」さらに「繋がること」を伝えてくれた一冊であった。

書架には、児童書の棚に置かれている本ですが、本を読む時、読み手の年齢の下限はあるが上限はないことを示してくれた一冊でもありました。(さすが、図書館司書さん)

読書会に「新しい風」が吹き込みました。図書館の皆さんの選書による読書会で、ますます広く深い「読み」が続くでしょう。ますます読むことの「楽しみ」が増えました。



児童文学者の書いたヒロシマ原爆の話。二年前に書かれた本、何をつたえたかったのかと思う。今だから本にしたかったのかと。

◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◆  
作者の朽木祥さん被爆二世。児童文学なのでとても読みやすいです。  
戦争の悲惨さをとても抑えた筆致で表現されているが心に深く浸みこんできます。家族で  
読んでもいいと思います。

◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◆  
児童図書向け乍ら、被爆2世の作者の平和希求に対する思いがよく伝わる。  
福島原発事故後、殊に放射能の威力の酷さを日本人は三度も受けている。  
何人も記憶にとどめなければいけないヒロシマ、ナガサキ、フクシマであり平和に暮らして  
いた市井の人々の無念さをこれからもずっと伝え続けなければならない。  
現在の世界の情勢もあやうい空気が漂い、平和の大切さを痛感する。  
武器で解決することはこの世界では絶対有得ない。

◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◆  
読み終って…(今まで自分の中で、ある程度は知っていたつもりで居たが)、被爆に合っ  
て、苦しみ乍ら、死を迎えた人、又その身内、骨一つも見つからず…子供や親の死を認め  
ざるを得ない人。私では、問題が大きすぎて解らない。ただ苦しみ乍ら、モロモロ…やはり  
化学兵器は怖い

◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◆  
原爆は悪い、戦争はしてはいけない、と誰もが思うが私達の毎日の生活の中に、戦争へ  
向かう原因がある。意識していかなければと思う。読書会の中で『情報があふれているが情  
報が増える程人間は考えなくなっている』という話が心に残った。企業の利益中心の考え方  
国の富の奪い合いによって少しずつ戦争へ向かう今の世界の恐さを感じる。

◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◆  
原爆の恐ろしさを改めて考えさせられた。  
今、国は日本の未来の平和の為に、集団的自衛権の行使を考え、又原発も事故後も続  
けるという。私には何が正しいのか解からないが不安は募る。未来の子供たちの為に、日本  
はもちろん、世界中の人が仲良くなる方法を考えて欲しい。

◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◆  
伝える原ばくを子供の本としている著者はとてもよいと思う。  
美しいもの、きれいなものが好きだった人がみにくいものをみて耐えなければならないこと  
がいかに悲しかったことかわかります。

戦争を体験されて神も仏もないと感じる人もいますが、その中で教会で活動をしていらっしゃる方が出てきて本物の信仰だと感じました。

光は希望なのに悪夢だったという皮肉。



世代がどんどん交代していく中で、忘れてはいけない、戦争の悲劇を理解することがむずかしい私にも、とても読みやすく、毎年訪れる8月6日の8時15分を静かに目を閉じて平和の祈りをささげたいと思いました。



原爆投下後の残酷な内容であるにもかかわらず、詩のように美しく、シンプルな文章に惹かれました。しかし美しくれば美しいほど、その体と心の苦しみが浮かび上がってきます。

東京から広島に移り住んで10年になります。夏の暑い日、市内に出かけて、市電の窓からキラキラと輝く川を見ると、よく想像します。この川が死体で埋め尽くされた情景を。綺麗な街並みであればあるほど、地獄のような8月6日の風景に思いを馳せてしまいます。実際には見ていないけれど、原爆の恐ろしさ、残酷さは、いろいろな機会に学んできたつもりでした。

しかしこの本を読んで、本当に学んでいたのかと、疑問を持ちました。亡くなっていった人の無念さばかりに目が向いていたように感じます。生き残った人々の痛みを置き去りにしてきたように思うのです。あの日から生き延びてきた人々の痛みを本当に、本当に、分かち合おうとしてきたのか——朽木氏はそんな鋭い問いを、この美しく、シンプルな文章で、今を生きる私たちに突きつけています。

この問いは原爆のことだけではありません。あらゆる天災・人災で起こる、生き残った人々の痛み——それに本当に寄り添えるか、分かち合えるか。

そして多分、分かちあうためには、分かちあってもらえるための資格がいるのです。受ける方の人間の覚悟のようなものが。

分かち合う、受け止める——そんなことが今の時代は、できにくくなっているような気がします。今の時期に読まれるにふさわしい本であると思いました。

あの日を生き残った修道士が言います。死ぬのは誰でもよかったのに、どうして私は助かったのだと。生き残った意味がわからないと。

「私にはいまだに、その答えがわからないのです。だからこそ、あの日を記憶しておかなければと思うのです。あの日を知らない人たちが、私たちの記憶を自分のものとして分かち持てるように」

読んだ後、小学生の時、先生が石段の影のことを話していたことを思い出しました。影は年々薄くなっているのだと。いつか消えてしまうと。

でもその影は、私たち一人一人の心に、記憶に、くっきりと焼きつけられたいのだと思います。

◆ 6月課題本 ◆

## 『蝸ノ記』

葉室麟／著 祥伝社

「檀野殿は 武士じゃ」

「武士としての自分の勤めです」

今回の作品に限らず、時代小説と呼ばれる中心のセリフは、この種のものが多い。江戸時代を背景にした小説では、身分制度が固定した安定の中に生きるのだから、小競り合いを大きく取り扱うことになる。

国盗り合戦を繰り返していた鎌倉から戦国の世まで、武士は戦う存在だったが、江戸時代になると刀の意味が変わったようだ。

この作品の登場者、檀野庄三郎も戸田秋谷も武士の身分だが、刀にかけてなさねばならぬようなことは起きていない。むしろ、刀を振り回すより、「武士である」という精神性が鞘の中に収まっている。といっても、「武士とは何か」と分析する話でもない。「みなさん、武士ってどんなものか知っているでしょ。」と作者は、話を始める。私は、子どもの頃から貸本屋を渡り歩いた。貸本屋は、今の図書館のように親切ではないから分類などしない。大人の本もけっこう読んだ。だから、時代小説の部類も読んでいて、『蝸ノ記』も、なんだか見慣れた作品だと感じてしまう。珍しい時代小説ではないな、と読み終わった。歴史上の人物をモデルとして小説を書いてきた作者としては、架空の時代小説を書く自由なおもしろさはあったかもしれないが、モデルとされたその本人の人生の厚みに助けられることはない。だから小説の厚みは、作者一人の厚みとなる。

強いて上げれば、「風露新香隠逸花」という古溪和尚から贈られた偈が、登場者の名前の由来になっていることをさりげなく盛り込んでいることや、百姓と共に生きようとしている戸田秋谷が武士のあり方に疑問を持ち始めたことなどが、取り上げられる。

刀で領地のぶんどり合戦をしなくなった時代、武士は何を役割としていたか。

例会で、参考図書をたくさん紹介してくださったおかげで、疑問に答えてもらえそうな本に何冊かであった。毎回、司書さんが同席して話し手に加わってくださるのは、運営上のやりくりが大変だろうが、質の高い市民サービスとして大歓迎である。



時代劇は絶対だめよ！と思っていた私も、読み始めたら、映像のように、美しい心と四季の自然が頭の中に流れて、あっという間にページをめくっていました。人や家族のために笑って死ぬことができる少年。命を救おうとして真実を知ろうとする庄三郎。最後には涙がでていました。映画も楽しみにしています。



豊後地方、現在の大分県中南部にあるという、羽根藩を舞台とした、時代劇です。

登場人物は善と称される側は全員、才色兼備、文武両道の美丈夫、主人公の友人までもが、言語伶俐、英邁を旨とする奏者番候補だったというこれまた美男で、友情あり、居合あり、不義密通の疑いあり、農民一揆あり、拷問あり、世継ぎ問題に絡む陰謀あり、悪代官あり、お馴染みの越後屋ばりの金貸しあり、切腹あり、のなんでもかんでも。成否を後世の目で確認するために、過去の事績を書き残す使命を果たした秋谷の切腹後は、子世代に、新しい時代が始まると期待させて終わります。

青田風吹く田園風景から始まり、春の桜の馬場でのほのかな想い、闇夜に響く不気味な鎖分銅の音、もう映像的にも美しいのです。しかし、清流に住む鮎ばかり食べていたのでは…という気もしますが。とにかくなんでもかんでもありの、読みやすい、簡単に読後のすっきり感を味わえる小説でした。



善行からは美しき花が咲き、悪行からは腐臭を放つ

武士とは、人間とはかなしくさみしいことなのですね。

恨みは流れる水の如きもので、絶えることなく続くこれをいつ断つか、止めることが出来るか、そこがむつかしいところです。



蝸＝日暮し 表紙の絵で内容がわかる本でした。凜とした一人の男の人の生きざま。ぶれない生き方に共感しました。家族・彼に従事した若者すべての人々に強い影響を与えています。筋立ても理解しやすかったです。



心正しく生きる者には皆が感化され、生き方を変えていく。悪事にかかわった者も、計り事を企み出世した者も心をゆさぶられ感化される。そんな人に出会えた人は幸せと思った。と同時に自分はそういう人に出会っても気付けない程我良しの人間になっていないか、素直さを失いつつある自分に悲しくなった。



命の期限を切られ村に幽閉された戸田秋谷一家、彼らを監視する為に遣わされた若き庄三郎。共に生活するうち、理不尽な状態に於ても凜として生きる家族の姿にいつしか心ひかれてゆく庄三郎。彼等を取りまく時の移ろいが映像として浮かぶ。殊に瑞瑞しい新鮮で美しい村が圧巻。



限られた人生を生きる主人公の姿を通して人生は長さではないと感じた。自分の志通りに生き抜くことができればそれは、生ききったと言えるのではないだろうか。関わる者が皆生き方を変えられる、凜とした生き方にすがすがしさを感ずる本だった。蝸のように来る日一日を懸命に生きるという文章が心に残った



### 一日一日を大切に生きるとは～

図書館の司書さんたちのおすすめ本による読書会の2回目です。

今回の課題本は昨年度の読書会に「わたしのおすすめの1冊」として紹介していたものでした。ですから、図書館からの選定理由を聴くことにワクワクしながら参加しました

今回は、「わかりやすかった」「すぐに読めた」の意見が多かったです。やはり直木賞に選ばれた本です。ですが、葉室さんのこの本は何回かの候補作品に足らなかったことを克服した作品との評価があったようです。

藩主の側室との不義密通と側室の小姓を殺した罪で「十年後の切腹」と「その間の家譜編纂」を命じられた戸田秋谷。切腹の期日まであと三年を残した頃、幽閉されている秋谷のもとに檀野庄三郎がやってきた。藩の奥祐筆である庄三郎は些細なことから場内で喧嘩による刃傷事件を起こした。本来なら死罪であるが格別の取り計らい死罪は免れることとなった檀野庄三郎。格別の取り計らいの代わりに庄三郎は秋谷が編集する家譜の内容を伝える事、特に側室との不義密通のことがどのように記されるかを報告するという家老の命を受けてやって来たのであった。

庄三郎の目を通して語られる秋谷の人間性。それは、「武家組織」のひとりとして生きる秋谷が語られる。十年という期限を切られた「生」のなかでは、どう生きるかは自分で決定できることである。たとえ組織人として生きるにしてもその中に自らの意思を込めることはできる。家譜とは違うことを込めたもの、その象徴的なものが『蝸ノ記』(本のタイトルでもある)と記した秋谷の日記ではないだろうか。日記も終わりを象徴的にあらわしている。

後世の人がそれぞれに判断できるためには、事の事実を事実として(良きことも悪きことも)感情を込めずに書き綴る秋谷の姿勢に、自分の生を後世に繋げることの秋谷の決意を感じる事が出来た。秋谷には十年の生がわかっていますが、われわれにはわかりません。とすればかけがえのない一日一日を大切に生きるしかありません。その「大切に」の意味は

それぞれ違うと思います。今自分がどのような「組織」にいるのかを考慮することも大切なポイントでしょう。自分の立ち位置をよるべき「組織」をしっかりと意識していかねばと思った。

現代の為政者が「事実を事実」として継承できるのだろうか。過去の事実をしっかりと踏まえた政治を行ってほしい。また、多くの人々(民)の中に自分の身をおきながら政治を行うことを「組織」の一人として行ってほしいとも思った……戸田秋谷のように。

今回も紹介本はたくさんテーブルの上にあります。武士のしきたりや作法も時代を追うごとに変遷していることや「一揆」のやり方にもルールがあったこと。表現されたことが似ている著書の紹介等々読書の楽しさがまたひろがりました。



◆ 7月 ◆  
私のおすすめ本

今月のテーマは「わたしのおすすめ本」

今月は、自分のおすすめ本を紹介する『竹の音読書会ブックトーク』でした。一冊の本について語ることも読書会の方法です。読むことだけに終わらず、アウトプットすることが「読み」を深めていくことであり、本だけに止まらず人やものへ「つながり」を広くしてゆくように思えました。

今月の読書会では、30冊以上の本に出会いました。当日、参加できない方からも参加していると同様な文書参加があり、『竹の音』での本を通した繋がりを嬉しく思いました。

参加してこそ得るものは大きいのですが、当日の参加が無理でも文書による参加も可能なことを本日は確認できた会でした。もちろん原稿を皆さんにわたるように準備して頂いた図書館あつてのことです。図書館の配慮に感謝です。

今月はブックトークするための短い文で書いていましたし、紹介する本を3冊つなげたような文を書いていました。ですが、参加者や講師の先生からその本の持つ「うまみ」や「テーマ」等、書いたことを深めてもらうことができました。書くことはしんどいですが、おもしろみもあります。

3冊の本を紹介します。1冊ずつでもおもしろいのですが、一連の物として読むのもおもしろいです。

**『もしも利休があなたを招いたら 茶の湯に学ぶ“逆説”のもてなし』**

千 宗屋／著 角川書店

「おもてなし」の言葉が流行しています。その心を学ぶために「お茶をならいたい」と考える人が多い。たしかに茶道には「もてなし」は重要なキーワードであるが、現代のとらえる「もてなし」イコール「サービス」という感覚とは異なりもっと深いものがあると説きます。

(抜粋)「……お茶の場合、相手をもてなすということは「ある相手に対しての、自分にしかできないもてなしをする」、ということが前提にあります。主体は相手であると同時に、自分自身でもあるのです。ただ一方的に相手を持ち上げ、相手が要求するサービスを提供するのではなく、相手をもてなすことで自分自身を見つめ、その自分を通して相手をもてなす。そういう行ったり来たりがあつてはじめて、お茶のもてなしになる。本来、お茶に限らずもてなしというのは、そういう相互方向のものだったはずです。」

「はずです。」の言葉の続きは残念ながらそうでない現実があると続きます。

茶の湯は、作法としきたりの世界という見方からすると意外に思えるのが、茶事にあらわれる主人の人間関係哲学ではないだろうか。

茶道は、人間関係の縮図が込められているとか……。本書は千利休を導き手として、現代日本を問いなおしているとも思えました。

### 『利休にたずねよ』

山本 兼一／著 PHP研究所

映画化され三千家の茶道具も使われたようです。著者の山本さんはこの本を著すために実際に茶道を体験したようです。

命ぜられるままに切腹をする利休。時の権力者秀吉に、研ぎ澄まされた感性や艶やかさを疎まれた利休。自分が求めた美の世界に殉じた利休であったと思います。女の物と思われる緑釉の香合を肌身離さず持つ男、利休。ひとりの高麗の女に飲ませた。「あれからだ、利休の茶の道が、寂とした異界に通じてしまったのは。」(本文より)主人公を変えながら一人称で語られ、利休伝説のベールが剥がされていく歴史小説である。

### 『本覚坊遺文』

井上 靖／著 講談社

一人の人物をいろいろな方向から見るができるのも、読書の醍醐味です。一連の紹介の最後は、歴史小説ではなく小説の手法で表現されることで利休というよりも茶道を通して日本人の精神性を追求、表現しようとした利休の精神(哲学)の方が(同時代を生きた人も含め)後世の人々に重要なことであると井上靖は考えていたと思われる。

「形だけ整えること」「成果主義」に走る昨今。精神性について考えるためにもおすすめです。



### 『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』

遥 洋子／著 筑摩書房

「いかに人がひとつの思考から自由ではないか」。社会の固定概念、普通と呼ばれる常識の、「枠」を疑うこと。知らず知らずに囚われている自分の考え方を見つめ直すこと。普通の常識や固定概念、それらにどれだけ自分が、周囲の人々が縛られているか。そのせいでどれだけ生きにくくしているか。社会の外側から物事を見直す。今まで何となく納得いかなかったこと、気持ちの悪い違和感、怒り、そんなものの正体がわかる。

「今まで見えなかったことを見せてくれる」、そんな本。

例えば…本能とよばれるもの。

「ああ、その響きの美しさ、怪しさ、胡散臭さ、卑劣さ、醜怪さ。あらゆる女の訴えがこの一言のもとにねじ伏せられ、利用された。マイクロは家で。マクロは国家で。それが女自身まで倒錯させるほど危険な概念であることに気づくまで、どれほどの年月を必要としたか」

フェミニズムは、杵を見直し、壊す。言葉という武器を使って。でも道案内がないと、とっつきにくくもある。よちよち歩きの私たちを、上野千鶴子の服の端にしがみついた遙さんが、その道案内をしてくれている。そして学問の苦しさを延々と連ねた文章からは、学ぶことの楽しさが伝わってくる。時々読み返し、読むと何か夢中になって学びたい！と毎回思わずにはいられなくなる・・・そんな本。

こんな風に書くと、堅苦しい本と思われるかもしれないが、そんなことはない。目次を抜粋すると「教室は四角いジャングル」「本物は違う!!」「『わからない』という言葉の持つ力」「学生たちとの交換条件」「美貌と巨乳と学問の価値」などなど。

読むと、上野千鶴子の格好良さに惚れ惚れし、遙さんの戸惑い、苦しみ、喜びに共感し、エールを送りたくなる。



それぞれの人が選んだ本。出席者は少なかったがその分内容は濃いものとなったと思っています。他の人からのおすすめ本、それもいつか自分も読んでみたいと思いました。

### 『ポーランドに殉じた禅僧 梅田良忠』

梅原 季哉／著 平凡社

彼は修行を積んだ仏僧だった。しかし、海を渡りポーランド語をはじめとする外国語の達人となった。歴史・考古学者として学績を残した。日本人として生まれたが、ポーランド人として死ぬことを願い、その願いに殉じた。ただ、謎が残っている、それは彼が「スパイ」だったかどうか。これは梅田良忠という日本と欧州を生き抜いた男の実話である。

### 『宇宙を目指して海を渡る』

小野 雅裕／著 東洋経済新聞社

「僕は宇宙を目指して海を渡った。あなたは何を目指して海を渡るのだろうか。」一番大切だと思うのは、それぞれ若者が他人の流布する価値観に追従することではなく、自分の夢を持つことである。夢は昔も今も若者の心を鼓舞し駆り立て広い世界へと導く最大の要因であり続けると思う。

### 『風に立つライオン』

さだ まさし／著 幻冬舎

ケニアのナクールにある長崎大学熱帯医学研究所に出向した柴田航一郎医師。アフリカの光と影、美しさと厳しさ、雄大な風景、風に立つライオンという歌からこの物語を書きあげた。



## 『55歳からのハローライフ』

村上 龍／著 幻冬舎

子育ても仕事も一段落しての生き方の迷い。NHKですでに、一部放送されていますが、原作はもっと素晴らしいのではないかと期待をして読みました。映像より何倍もの情けいが描かれて深い思いを感じました。

アンティークなものを、大切に使いつづけるかのように、年を経た人間の体や物事の行いひとつひとつにいていねいな生き方をしている様子が、励まされます。

例えば紅茶の入れ方、声のかけ方話し方にあらわれて、中年ってすばらしい！と感じます。

そして、今までの人生の中で得て来たことの中でさらにまた迷っている人間の様子もまた人生の奥深さを感じます。



## 『天命』

五木 寛之／著 東京書籍

この年まで生かしてもらい、これから死をどう迎えばよいのかという事は一番の関心事です。題名にひかれてその答えの一部でもみつかればと思い読みました。



## 『火群(ほむら)のごとく』

あさの あつこ /著 文芸春秋

江戸時代の武士の若者たち(12～13才位)の剣にかける、正義にかける情熱・友情・生きることを描く。

新里林弥の兄、結之丞が夜道刺客によって惨殺された。

真犯人を探すために弟の林弥が懸命に剣のうでを。道場に通う。

心の呟く

今のおれには、これが精一杯だ。

だとしたらどうしたら勝てるのだ。

剣を究めたいだけだ。強くなりたい。

人を斬りたいわけではない。

周囲の空気は、派閥・重臣達の怪しい影が見え隠れする。

ある闇の夜道、一瞬 全身が慄き背中が疼いた。

意識が束の間、刀を抜き闇を払った。

人の肉を斬る手応えだ

誰だ、そこに倒れているのは！なに義兄だ

(おれが、おまえの兄、結之丞を斬った。命じられただけだ)

林弥は空を見上げると、光の中に鶉を見た  
満足そうに微笑んだ……。おわり  
感想・・・若者たちの剣に夢中になる姿  
何でも一途が良い。でも  
時には休み乍ら。

◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆  
私のおすすめ本 斜体 は TRCMARC 内容紹介より

『もしも利休があなたを招いたら』

千 宗屋 / 著 角川書店

千利休の美学を継ぐ若き茶人が見つめた、現代人とお茶、そして日本文化の幸福な関係。接待ともサービスとも違う茶の湯的「主客」論から、古くて新しいコミュニケーションの作法を説く。

『利休にたずねよ』

山本 兼一 / 著 PHP研究所

わしが顔づくのは、美しいものだけだ…。おのれの美学だけで天下人・秀吉と対峙した男・千利休の鮮烈なる恋、そして死を描く。『歴史街道』連載を加筆修正し単行本化。

『本覚坊遺文』

井上 靖 / 著 埼玉福祉会(大活字)

底本: 講談社文庫「本覚坊遺文」 限定500部

『ぬけまいる』

朝井 まかて / 著 講談社

若い頃は「馬喰町の猪鹿蝶」で鳴らした江戸女3人組が、それぞれの鬱屈を胸に、仕事も家庭も捨ておいて、お伊勢詣りに繰り出した。かしましい道中は波乱の連続で…! ?

『ポーランドに殉じた禅僧梅田良忠』

梅原 季哉 / 著 平凡社

ヤルタ会談以前にソ連の対日参戦の情報を入手した男がいた。なぜ機密情報を入手できたのか。彼は、スパイだったのか。第二次大戦下の欧州で、インテリジェンスの世界に身を投じた禅僧梅田良忠の波瀾に満ちた生涯を描く。

『ポーランド孤児・「桜咲く国」が見つないだ765人の命』

山田 邦紀 / 著 現代書館

第1次世界大戦後の混乱期、酷寒のシベリアからポーランドの孤児たち765人が日本赤十

字社の手で救出された。なぜシベリアに大勢のポーランドの子供たちがいたのか？ 日波友好の源となった歴史感動秘話。

### 『夫からのモラル・ハラスメント』

まっち〜／著 河出書房新社

夫からの精神的イジメ、モラル・ハラスメントを受けた著者が、モラハラと気づいてから離婚するまでの闘いなどを赤裸々に綴る。心理カウンセラーによるコラムも収録。『モラルハラスメント・ブログ』を書籍化。

### 『宇宙を目指して海を渡る』

小野 雅裕／著 東洋経済新報社

子供の頃からの夢を追って、マサチューセッツ工科大学に6年半の留学。30歳でNASAジェット推進研究所に職を得た著者が、自身の足跡と、その過程で得た知見や哲学を記す。

### 『命のビザを繋いだ男 小辻節三とユダヤ難民』

山田 純大／著 NHK出版

杉原千畝の「命のビザ」で日本に逃れたユダヤ難民たちに、命を賭して救いの手を差し延べた小辻節三。日本でのビザ延長の秘策、ユダヤ教への改宗…。俳優の山田純大が、自伝や取材をもとに、小辻の生きざまを明らかにする。

### 『風に立つライオン』

さだ まさし／著 幻冬舎

1988年、ケニアの戦傷病院で働く日本人医師・航一郎のもとへ少年兵ンドウングが担ぎ込まれた。“心をなくした”彼を航一郎は包み込み、生きる希望を与える。2011年3月、医師となったンドウングは被災地石巻を訪れ…。

### 『東京にオリンピックを呼んだ男』

高杉 良／著 光文社

戦争中、収容所入りを拒み、ユタ州キートリーで農園の経営に挑戦。戦後、ロサンゼルスでマーケット経営に成功し、祖国日本への支援を惜しまず、東京オリンピック招致に身を挺した。‐真の愛国者”和田勇の生涯を綴る。

### 『上昇思考 幸せを感じるために大切なこと』

長友 佑都／著 角川書店

すべての出来事は捉え方次第でどんなふうにも変えられる。イタリア・セリエAで活躍する長友佑都が、世界で戦うメンタルを支える思考法を明らかにし、幸せを感じるために大切なことを伝える。

### 『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』

遥 洋子／著 筑摩書房

知る人ぞ知るケンカの達人・遥洋子が、そのケンカ道にさらに磨きをかけようと、東大・上野

ゼミに入門。今、明かされる究極のケンカ道とは？ フェミニズムの真髄とは？ 格闘技としての学問に分けいる。

### 『55歳からのハローライフ』

村上 龍／著 幻冬舎

結婚相談所 空を飛ぶ夢をもう一度 キャンピングカー ペットロス トラベルヘルパー  
多くの人々が、将来への不安を抱えている。だが、不安から目をそむけず新たな道を探る人々がいる。さまざまな彩りに充ちた「再出発」の物語。連作長編。『大阪日日新聞』他、地方紙連載を単行本化。

### 『望郷』

森 瑤子／著、竹鶴 リタ／被伝者 学研

スコットランドに生まれ育ったリタは、日本人で初めてモルトウイスキーの製造法を学びにやってきた竹鶴政孝と運命的に出会い…。ニッカウキスキー創業者・竹鶴政孝と、妻リタの人生をモデルに描いた長篇伝記小説。

### 『雪の炎』

新田 次郎／著 文藝春秋

### 『天命』

五木 寛之／著 東京書籍

人は天命を知り天命に生きる。もともと善良でもともと愛した人がなぜまっ先に死ななければならなかったのか。受けいれがたい不公平な死をどう乗り越えて生きていけばよいか。五木寛之が赤裸々に綴る。

### 『赤毛のアン』

モンゴメリ／著、村岡 花子／訳 新潮社

### 『柚子の花咲く』

葉室 麟／著 朝日新聞出版

愛とは、学ぶとは、そして生きる意味とは？ 恩師殺害の真相を探るべく若き日坂藩士・筒井恭平は、隣藩への決死の潜入を試みる…。魂を揺さぶる長篇時代小説。『小説トリッパー』連載に加筆修正し単行本化。

### 『楽園のカンヴァス』

原田 マハ／著 新潮社

ニューヨーク近代美術館の学芸員ティムは、スイスの大邸宅で巨匠アンリ・ルソーの大作「夢」とそっくりな絵を目にした。ティムは絵の真贋をめぐって、日本人研究者の早川織絵と火花を散らす。『小説新潮』連載を単行本化。

『セブン・イヤーズ・イン・チベット チベットの七年』  
ハインリヒ・ハラール／著 福田 宏年／訳 角川書店

『火群(ほむら)のごとく』

あさの あつこ／著 文芸春秋

山河豊かな小藩、少年剣士たちは身内の死や身分の葛藤を越え成長してゆく。子供と大人の境にある凛々しく、まばゆい一瞬の季節を瑞々しく描いた青春時代小説。『オール読物』連載を単行本化。

『平気でうそをつく人たち 虚偽と邪悪の心理学』

M・スコット・ペック／著、森 英明／訳 草思社

自己正当化のため巧妙かつ隠微なうそをつく邪悪な人たちの心理とは。うそをつき、周囲に負担を強いる人々の心理を鮮やかに分析。具体例をあげながら、人間の悪の本質に迫るスリリングな書。

◆ 8月課題本 ◆

# 『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス／著 早川書房

早川書房というと、題名には拘わらず先ずSFかなと思う。海外のSF翻訳路線が続いて居る出版社のイメージが定着している。だが、この作品を読んでいるうちにSF的感覚が薄れ、先進医療研究の報告文書が続くノンフィクションのような気になってしまう。経過報告というこの作品の構造がそう思わせている。しかも、報告する主が、医療スタッフではなく、患者という立場だからドキュメンタリータッチのヒューマンドラマとして成立する。

粗筋だけをまとめてしまえば、IQ68の32才の男性が手術を受けて、IQ185の驚異的知能の持ち主になり、やがて元の知能に戻る物語である。

サイエンスフィクション(SF)は、科学的にはいかにもありそうで、実際にはあり得ない虚構の物語を指すが、とは言え、人間の現実から全く遊離した虚構では読者がついていけない。その点では、この作品は現実の人間の姿に沿っていて、そうだなと思わせることが沢山出ている。知識は学んで積み上げて行くことは出来るが、情緒は知の増大に伴わない、ということを感じてしまうことになる。高学歴でありさえすれば、それで良いのかという現実も深刻だから、作品世界の虚構だと割り切れる娯楽性はない。主人公の気持ちを想像して、共にうなずきながら苦しみつつ考える読書となる本だ。

白いネズミのアルジャーノンが、研究の先行モデルとなり、やがて主人公の身に起きることを予見させる。過去も、未来も、知ることについて苦の種となる。主人公チャーリー・ゴードンの知の増大は、知の計りにかからない苦をもたらした。

「知らない方が良かった」そう思うことが現実世界でも起きる。

では、知の増大を拒否するか。それに対して自分はなんと答えるのか。

私は賢くなりたいと思う。なぜか。自分が、今、独りで生きているのではなく、あらゆることについて相依(全ては繋がりの中にある)の関係なのだを知りたいからだ。そして、いつかそれを知ることが出来なくなっても(認知症ではそうなるだろう)、認識出来るかどうかは問題ではなく、事実として、私は沢山の繋がりの中に居るだろう。

今、私は、この事実が認識できている。が、いつまで解って居るだろうか。とすれば、私が知っているということが どれほどの値打ちをもつだろうか。自分が知っているということに寄りかかって生きていくとすれば、これほど頼りないものはない。

賢くなりたいのは、そういう過去、未来、そして現在の関係性を深く知ることが、今日の私を幸せにしてくれるからだ。未来は、今の関係性の中にある。そうとすれば、予見する未来は、バラ色でもなく悲壮でもなくなる。今、自分が未来を生きているのだから。

自分の知る力なんて、しれている。今生きているという現実の理由の理解は、全宇宙を知得するしかない。それが出来ない身だからこそ、自分が知るということに頼れない。

チャーリー・ゴードンも、〈ぼくはこれから行くところで友だちをいっぱいつくるつもりです〉と、関係性の中に、自分を投げ出す。

IQ68になるかもしれない私から、主人公チャーリー・ゴードンに、後を歩く同質者として花束を贈ろう。未来を、思い煩うことはない。未来は突然来るのではないから。



皆さん賢くなりたいと思いますか？ との問いかけから始まった今回の読書会。

私は、賢くないよりは賢い方がいい、と思う。

もし、知能を高める手術などというものが本当に成功するなら知的障害のチャーリーは、きっと今より豊かな人生がおくれて幸せになるのではないかと思っただが、意外にも天才になった彼は幸せにはならず、友達は離れていき孤独で淋しい人間になってしまったのである。知能が、世間や仲間に対する信頼をこわしてしまったのである。

智恵や知識が増えていくと共に増えていったものは何なのか？

傲慢さ、自尊心。他人の事を考えることのできない自己中心的な心。

もし、一足先に天才になったハツカネズミのアル・ジャーノンが、チャーリーに何か言い残すとしたら？

優れた知能だけでは何の意味も無い。人を思いやり、愛し、愛され、仲間や家族と共に生きていくことに値打ちがある。ということではないだろうか。

結局、チャーリーは知的障害に戻ってしまったが、「アル・ジャーノンのお墓に花束を供えてあげて下さい」と言ったように人間的な優しさが戻っていた。きっとまた、友と共に幸せに暮らせるだろう。もう、孤独なチャーリーではないのだ。

この会の最後に、「皆、自分の知性を信じているが、それは壊れるもの。アルツハイマー等、病気ですべてを忘れてしまった時、最後に残るのは、今、自分が作っている周囲との関係性。自分の知性はどれだけ信じられないものか、ということを知るために賢くなりたい」との先生の言葉が心に残った。



「生きる意味」ではなく「意味」をつきぬけること～を自分のものとするために

今月の課題本の著者ダニエル・キイス氏が、2014年6月15日亡くなった。享年86歳。

この本には、若い頃(紹介者は、19歳の学生の頃とか)の出会い、更に年を重ねてからの出会いと、時々のお会いに耐えうる力のある本ではないだろうか。まさに世阿弥のいう「時々  
の初心」になれる本である。

講師の先生からの本日の最初の問いは、「賢くなりたいですか。」でした。本日の担当である司書さんは、図書館を訪れる一人一人のニーズに応えたいので、更なる知識を得て「賢く  
」なりたいと語られました。突然同じ質問が、ふられました。(順番はないのですが、いつもと  
違う始まりに内心どぎまぎ……)「賢い」の基準がわからないので、「分からない」と答えた私  
です。しかし、そう考える事こそが「左脳思考」であると今は思います。

この物語の主人公である知的障害の青年チャーリーは脳手術の実験で天才へと変貌をし  
ていきます。急激な成長による「知」と「情(感情)」のバランスが取れない状態で、手術前の  
素直な心を失い人間的なつながりを保つことが出来なくなるチャーリー。再び知能が低下し  
始め最終的には、急成長した知能や記憶を全て失う。(思いやりなき知性は無意味だ)とダ  
ニエル・キイスは現代文明への批判を行っている。彼の作品は『SF』—サイエンス(科学)  
フィクション(空想)—である。だが、フィクションではない気がするのは私だけではないはず。  
人間の「左脳思考」ばかりが肥大していった結果「人」が「人間」となりえず、さまざまの事件  
や社会の荒廃が起きている。青年チャーリーの前に同様な手術をされた白ネズミのアル  
ジャーノン。さまざまの高度な学習をクリアしていき、凶暴性も増幅していく。そしてつい  
に死んでしまう。その過程も現代文明のなかで現実には起きている。そのなかで、いかに生き  
るかキイスは、「科学」ではなく「文学」で自分を見つめさせてくれる。施設に収容される  
チャーリーは「ついでがあったらアルジャーノンに花束をそなえてやってください」と頼みま  
す。自分と白ネズミが重なったからだ。

「生きる」とは……「右脳思考」「宇宙的規模でとらえる」等々難しく、答えがすぐ出るものでは  
ないかもしれないけれど、人間の関係性について語り合える本でした。

参加者は、この本から次の本へと手を伸ばしました。(図書館からブックトークのあった本  
です。)

みなさんの感想文を読ませてもらうのを楽しみにひとまず感想文を書きました。

司書さんの紹介本を読みキイスの現代におけるモラルについて読み取りたいと思います。  
良き本との出会いと語り合える関係性に感謝します。

追伸

「アルジャーノンは、チャーリーに何を伝えるだろう」と講師の先生から問いがありました。こ  
のことでリライトするのも(『白き瓶』で挑戦したこと)おもしろいと思いました。書いてみてわか  
ることが、見えることがあります。





いずれは必ず失われてしまう知識。結局、最後まで失われないのは、「知識」ではなく、今築いている、これから築いていく、人や世界とのつながりなのだ、というお話に、はっとした読書会でした。

アルジャーノンがチャーリーに何か言い残すとしたら、という問いかけが会の中でありましたが、そのときに浮かんだ言葉を、ここで書かせてもらいたいと思います。

しんあいなるチャーリー

君のこと、かんじったりしたけど、ごめんよ。君にも、きっと、これからいろんなことがおき  
ると思う。でも、ほんとうにたいせつなものを見失わないようにね。きみには、たくさん、と  
もだちがいるのを忘れないで。

追伸 どうかついでがあったら、ぼくのおほかに、花をいちりん、そなえてください。

君のともだち アルジャーノン



以前読んでいたので、そのあらすじ—知的障害のあるチャーリーが手術を受けることによつて天才的な頭脳を持つようになるが、やがてまた知能が下がっていく—は覚えていましたが、あらためて読んでみて、その内容の深さに、一体私は何を読んでいたのか、と自分の読書の仕方にちょっとあきれられるような思いがしました。ちょっと話はそれますが、読書会に参加し続けてよく思うのは、読書にも読み方という訓練が必要だということです。この、読み方を知っているのと知らないのでは、本の味わい方がまるで違います。本の世界に入り込むキー（鍵）となる、と言ったらいいのでしょうか。そのキーを持てば、あらすじだけを読む読書ではなく、分け入るような読書ができます。次から次へと新しいドアが現れ、その閉ざされたドアをこのキーで開けていくことができます。（まあ、開けるとまた新たなドアが出てきてしましますが…）

そういう読書は、今までの自分の価値観を揺さぶります。破壊するような威力を放つこともあります。一冊の本が、私の世界を新しく、豊かにしてくれます。これを一度味わってしまうと、おもしろくてやめられません。そんな読書を味わいたい方は、是非一度、読書会にお越し下さい。

今回の読書会では、「かしこさ」とは何か、ということにキーにして始まりました。「かしこくなりたいですか？」と聞かれ、返答に困りました。知識をたくさん持っていることがかしこいのでしょうか？私はなぜかしこくなりたいのかと考えました。より生きやすくなるため、と思いました。つまり私のかしこさは他人とうまくかかわるためのコミュニケーション能力を向上させること、のようです。生きていくため、の手段。チャーリーもそうだったのではないかと思います。かしこくなれば、今よりもっと他人とうまくいき、楽しくすごせる、と。

知識を得ることと同時に、チャーリーは自尊心を得ました。傲慢ともいえるほどのプライドを。知能が低くても、アリスのいう「以前のあなたには何かがあった。よくわからないけれど…温かさ、率直さ、親切さ、そのためにみんながあなたを好きになって、あなたの相手をしたい

という気になる、そんな何か」があったのに、失われてしまいました。まるで以前のチャーリーと今のチャーリーは別人のように。でもどちらもチャーリーなのです。チャーリーは私だ、と何度も思いました。自尊心と、相手を思いやる気持ちと。いつもどうやってそれらをうまくコントロールするかで悩みます。

そして、チャーリーはある日気づきます。

「そうして私はほとんど忘れていた。人々が私を笑いものにしてたことを知ったのはつい最近のことだ。それなのに、知らぬ間に私は私自身を笑っている連中の仲間に加わっていた。そのことが何よりも私を傷つけた」

私は気がつかないうちに、傲慢になってしまいます。人に見下されて、自分はいかなるまいと強く思っている、気がつくと同じようなことをしています。忘れてしまう生き物なのです。でも、また気づき、やり直すこともできます。生きていく限りにおいては。

最後の経過報告。「ついしん。どーか、ついでがあったらうらにわのアルジャーノンのおほかに花束をそなえてやってください」。有名なくだりです。

チャーリーはアルジャーノンだけに花束を供えたかったのではなく、天才的な頭脳を持っていた、でも孤独だったあのチャーリーも弔ってあげたかったのだらうと思います。アルジャーノンとチャーリーは同じですから。知能がもどってしまったチャーリー（実はもっと知能が下がってしまうかもしれませんが）は、あの天才的知能を持つ彼のことはあまり覚えていないかもしれませんが。しかしチャーリーはチャーリーの中に、彼もまた生きていくことを、きっと感じていると思うのです。うまく言葉にはできないけれど。

そして何よりもこの先のチャーリーの人生に希望が持てるのは、チャーリーが今までのことを悔やんでいないということです。

「この世かいいにあるなんてしらなかったたたくさんのこともおぼいたし、ほんのちょとのあいだだけれどそれが見れてよかたとおもっているのです。それからぼくの家族のことやぼくのことをよくわかたのもうれしいです。みんなのことをおもいだしてあうまでわ家族なんかいないのとおんなじでしたけれどもいまわ家族もあることがわかっているしぼくもみんなみたいな人間だとわかっているのです」

ここには、生きるために「知ることは正しい」というメッセージがあります。また、「知ることは「生きること」ともいえそうです。

「みんなと同じ人間である」とわかったということが、チャーリーにとってどんな知識よりも、これから生きていくための大いなる力になっていくはずですよ。

◆ 9 課題本 ◆

『もの食う人びと』

辺見 庸／著 共同通信社

「食欲の秋」と言い習わしていることに引っ掛けられたわけでもないのだろうが、食べるという人間の(生き物の)根本課題を覗き穴として、30の世界を垣間見た。

今年は、図書館司書さんが推薦された課題本を中心にして読書会を開いているのだが、このおもしろさは類を見ないだろう。色々なジャンルから選んだおすすめに関連本を展示され、その中から数冊ブックトークをしてくださる。今回は特に、30の世界を覗くのだからと地図や解説まで用意された。実に理解しやすい。読書会は、こんなに“お得な”会ですよと大いに宣伝したいものだ。『もの食う人びと』に『水族館』という参考図書の取り合わせは密かに笑うユーモアだった。(実は、ジュゴンの写真を見せてくださったのだが。)30だろうと 195だろうと、どの国に生きようと、食べることは共通の言語なのだろう。辺見さん流に言うと、〈ああ、人とはもの食う器官なのだ〉ということになるのか。狩猟採集時代から農耕して蓄える時代に変化していく中で、「ものを食う」ことが、戦いの源になり、その解決が文化の発達とよばれることなのかと思う。今では石油も食う。

辺見さんに誘われて、自分の食事もあらためて考えてみた。

食べることを大事にされた道元禅師の『典座教訓』や『赴粥飯法(ふしゆくはんぼう)』は、飽食の時代と言われる現代を日本で生きている私には、大切な灯台である。今回の課題本が、あらためてそれを蘇らせた。『赴粥飯法』は、食べる側の価値観を問うもので、その「五観の偈」の中の一偈は、その食を受けるに値するかとつきつけられている気がする。有り難い命をいただいていると頭を垂れるしかない。道元禅師は、食も法(仏法)だと言われる。



世界の色々な人々の食のことが書かれているのだろうと思って読み始めたが、内容は思いのほか重く深く、世界の目に見えない問題が食べることを通して見えてきた。

司書さんが、タイトルごとに細かく内容を整理してプリントして下さった。30のタイトルの中で、どれか一つあげるとすればどれが印象に残ったか、との問いに、私は迷った末、ミンダナオ島での日本兵が行った組織的食人行為をあげた。

戦争は人間を変えてしまう。人間を狂わせてしまう。だから戦争はしてはならない。憲法9条は護らなければ。集団的自衛権反対。戦争に拠らない解決策を考えるべき。と思っているが、言うのは簡単。

しかし、先生と話しているうちに食べ物が戦争の原因になることにも気づかされた。食料を世界中から輸入し、その多くを廃棄している日本。お金にもものを言わせて、グローバリズムの世の中、富のある者、力のある国が他の国の食べ物を奪う。今でもなかなか飢餓状態の人々はなくなる。人口は増え続けている現状。では、人口を抑制すべきなのかという議論もある。いずれ日本が、食料の奪い合いで戦争になることも？

戦争はしてはならないと思うなら、人に責任を押し付けるのではなく、私にも今日からしなければならぬことがあると考えさせられた。

著者のあとがきに「飽食の時代が、あたかもそのつけが回ってくるように、空腹の時代に転じるのは、そう果てしなく遠い先のことでないのではないか。」の言葉が胸にささった。



今回の読書会の課題本はジャーナリスト辺見庸氏が世界各地をジャーナリストとしての「目」から調査し、「食」という視点からそれぞれの国や地域の課題を読者に伝えているものであった。

本書には、食を通して30の「実情」が伝えられている。それらを理解するには、地図やそれぞれのレポートから考えられること、疑問へのより確かな答えを他の文献から調べなければならない。(調べなければ実情を理解する事ができない。)文字だけでなく、写真のような視覚からの情報も欲しい。写真集や図鑑である。今回もそれらが、課題本をより理解できるように参考資料として準備されていました。(ジュゴンの説明に水族館が出てきたのは、不思議な気もしましたが……………)

図書館からの資料集めは、力が入っていました。(感謝です。)

30の地域にポイントを打った世界地図。30の地域を国別に一覧表にし、司書さんがキーワードと思えることをピックアップし、先の一覧表に入れ込んでありました。辺見庸氏の他の著書とそれぞれの本に関する簡単な内容や著者の状況も一覧にまとめてありました。これらをそばに置いて、もう一度、読み返してみようと思います。ですが、内容はかなり深刻ですから、会員の中には「課題本になったから読んだけど、自分からは読まない本だ。」や「食事の準備ができなかった。でも参加しているいろいろな意見を聞けたし、この資料をそばにもう一度読んでみる。」など、読書会ならではの話があり、また「たのしみ」を創ることが出来た。

「9月の読書会」の様子に関する感想は、これぐらいにとどめて課題本の感想に移ります。

実際に読むと最初から強烈です。バングラディッシュのダッカでは、残飯リサイクルが行われている。まさに「残飯を食らう」のタイトル通りのことが日常茶飯で行われている。残飯が形を変えて闇市で売られているのである。通訳に自分が今口にしたもの、残飯であることを教えられ、さすがの辺見氏も(さまさまの地域を巡っている)のどの奥から黄色い液が上がっ

てくる。最初から強烈な事実を伝えられる。なにものつけから衝撃的な事実から入らなくてもと言いたくなる。読者にカウンターパンチをくわせる辺見氏の仕掛けとペンの力は、さすがジャーナリストだと感じた。辺見氏の選んだ地域の実態を「食べる」ということを中心とした食文化から覗き、見えてきた社会問題をどンドンと伝えてくる。事実を突き付けられた時、我々読者は、立ち止まる。そして考える。(こんな時に関連本の紹介や参考文献をブックトークしてもらっていると助かります。) 考えても答えなど出せるものではない。だから、自分以外の人の意見・受け止めを聴くことが私には大切になってくる。(読書会の必要性である。) 読書会では、同様な意見があれば、全く違う観点からの意見を聴くこともできる。答えは一つではないし、会での意見をひとつくりにする必要もない。

辺見氏が取材した国は、紛争が続いている国、飢餓と内紛の続く国等々問題を抱えた国々である。統一されたドイツで、ドイツ生まれのドイツ育ちのトルコ人の青年に出会う。この青年は、なかなかドイツの味になじめないでいる。そして「ほんとうのネオナチっていうのは…貧しいスキンヘッドじゃなくて、ほら、立派な背広を着て、革のソファに座ってるみたいな、上流紳士の心の中にもあるんじゃないかな。」と。外国人の排斥などはけって口には出さないが、現実には排斥事件が起きれば心の中で喜びの声をあげる人々のことである。確かに表面で事を起こす人よりも恐い存在である。「心の中のネオナチ」が統一されたドイツの中で存在するのだ。この青年は味覚だけでなくドイツに溶け込むことを激しく拒んでいる。「ぼく、だんだんトルコ人になっていく感じなんです。」ドイツ人になれなかったトルコ人の青年。両親から激怒されてもトルコの味に慣れ、言葉も学び、彼を愛し、彼の子供が欲しいと語るドイツ人女性。彼女は、国や味覚ではなく「個人」が問題だとも話す。どこであろうとその人間にとって必要なことが営まれているはずである。それを破壊することや奪おうとすることが“争い”のもとになっているのではないだろうか。

資料を提示して頂いたのもう一度読み直してみます。第一次の感想はここまでとします。



世界の人々が20年前にどんな生活をして、その中でどんなものを食べているのかを扱っている。

20年前だというのに、貧困や紛争の中で生活している。

こわいけど、何もなければのようにできることは、普通に精一杯している。攻撃されるかもしれないのに、普通に船を出して漁をする。あるものを食材にしておいしいものをつくる。

でも人間の肉を食べてしまった時代の人々の話はびっくりしました。

衛生のことを考えておられない人々。

最後に韓国の従軍慰安婦の人々の生活や、日本で食べて忘れられないおいしかった味、歌などは、一番印象深い。はきだせなく、受け入れられない人々の苦しみがよくわかる。

下水道の水で下半身を洗い、1日50人を受け入れ、避妊具を何回も洗って使う。戦争の悲しさ、苦しみを垣間見ることができた気がしました。

食卓の風景を楽しく幸せなものにしたい。

食物をすてないで、他の国の貧しい人々に分けてあげたいと切に願います。



まず、新聞やテレビでは知り得ない事実を知り、驚いた。そして作者は日本を、世界をうれて身近な食をテーマにして、世界各地を訪れ真実を知る旅に出る。すべて見聞、体験したことなのでストーンと心に入ってくる。素直に生き方、世界の平和をめざすには問題提起に真摯に向き合わねばという気持ちにさせられた。



食文化を通して、通信記者の目で世界の食べ物を知らせてもらった思いの本。20年前より今はだいぶ変わったことでしょう。



強烈です。覚悟して読んでください。特に調理前は気を付けてください。食事も一寸！でも考えさせられる事は山の様です。すべては食から始まっているのだと思いました。読後感は重いものでした。



本の題名からは、さぞ各国の特色ある食材、料理が楽しく読めると思いきや……。

バングラディッシュの残飯から始まり、ミンダナオ島の悲劇…戦後70年を経ても忘れてはいけない残酷な事実。

チェルノブイリの原発放射能の残留数値が高いと解っていても、そこでの生活を余儀なくしなければならない人達。

韓国の従軍慰安婦の人達。道具のような扱いをされた悲惨さ。

“ものを食う”と、“料理をしてうつくしい皿に盛って食べる”とでは、同じ口に入っていく品でも、大きな違いが有る。

各国でも、飽食でお腹を満たす人、食べ物を口に出来ず、痩せ細ってミルクも飲めず死んでいく赤ん坊……。均一にと言うことが出来たら……。重たい気持ちで終わりました。



食から見た、30の世界の話。「どれか1つを選ぶとしたら、どれ？」と読書会で言われ、とても悩みました。どの話も様々な価値観や問題を含んでいて、考えさせられることが多かったからです。

でも私は最後の「ある日あの記憶を殺しに」を選びました。かつて従軍慰安婦だった人たちの、今の話(と行っても20年前になってしまいますが)です。残酷な過去の出来事が、食の記憶とセットになって、よみがえります。

「記憶というものを、私たちはなめてかかっていると思う。五十年前とは、かなり多くの人びとにとって、昨日なのだ」

1994年1月、ソウルの日本大使館前で抗議の自殺をしようとした3人の老婦人。取り押さえられ、未遂に終わりますが、気持ちは変わりません。著者の辺見氏は彼女たちにつきまとい、自殺しないでくれと、それだけを懇願します。彼女たちにとって、残酷な記憶を抱えて生きていかなければならないことは、辛いことのはずです。それでも、辺見氏は生きろと言います。共に韓国料理を食べながら。加害者の国の民と被害者の国の民が、食をはさんで、向かい合う。同じ釜の飯を食う。話して、聞いて、話す。

人は不思議です。食を共にすると、ちょっと心がつながったような気になります。この感情は一体どこからやってくるのでしょうか。

また、ジャーナリストとしての辺見氏のあり方も興味深いです。彼女たちが受けたひどい出来事に対して、つらい思いに対して、彼は決して謝罪の言葉を口にしません。

「私は日本および日本人のだれをも、代表も代弁もしたくない。私は私だ。そう自分に確かめた。謝るのではなく、こうべを垂れ、もう自殺はやめてくださいと頼んだ」

あれだけひどい話を聞いたなら、その場にいたらおもわず謝ってしまいそうな気がします。私がしたことではないけれど、でも私に連なる日本人がひどいことをした、そして今もそのことで死ぬような苦しみを味わっている人が目の前にいたら……。とにかく謝って、良心の呵責から少しでも逃れたい。でもおそらくそこで謝罪することは、彼女たちに対して、不誠実であることになるのだらうと感じます。過去は取り戻せない。だから、今、一人一人の事実を聞くことしかできないし、それが唯一のできることではないかとも思います。

「金さんも、李さんも、味の記憶を含む個人史を長くゆっくり語るにつれて、鋭かった目がなごむ。一人ひとりの苦難は、ほかの元慰安婦たちの悲惨と同じに見えて、細部はやはり自分だけのものなのだ」

しかし、その聞くという行為はとても残酷な行為でもあります。話す方は思い出したくもない、できることなら忘れてしまいたい記憶とまた向き合わなければならないのですから。

「人の、静かな記憶の古井戸に石でも投げ入れるような、二度とはできない罪深い仕事ではあった」

「自殺はやめてほしい。私の気持ちはそれだけだ。その先は、ない。生きる、その長さの分だけ続く彼女たちの記憶を、私はどうすることもできない」

おそらくこの覚悟、謙虚さがなければ、聞き出すことはできなかったのではないかと思います。聞くことにも、聞く側の覚悟がいるのです。あらためて、ジャーナリストとはどのような人を、どのようなあり方を持つ人のことを言うのだらうと、考えさせられます。

「見えざる食いものも食った。記憶である」

食べることは、かみ砕き、味わい、自分の体の一部にすることです。自分の中に取り込むこと。記憶に飲み込まれるのではなく、飲み込むこと。分かちあうことだけが、悲しみを和らげるのだと、あらためて思いました。



リゴラス』や『かいじゅうのうろこ』の絵本では、よくわからなかったことを伝えているように思います。

主人公の樵は、夏休みに母の故郷である長崎を訪れる。一番の目的は精霊流しを見る事であった。そこに暮らす母の弟である、叔父檜二を訪ねる。檜二おじさんは、樵に長崎の原爆のことも資料館を案内しながら家の窓枠のゆがみを見せながら伝えていく。「精霊流し」は仏教的行事であるが、同日の8月15日はキリスト教では、イエスの聖母であるマリアが亡くなった日(天国にあげられた日)で聖母被昇天の日と言われている。また、精霊流しの日であり聖母被昇天の日は、ザビエルが日本に来た日でもあり日本のキリスト教信者にとっては大切な日であることを教える。次に訪れた所は、亡くなる一か月前に洗礼を受けた祖母の行きたがっていた外海(そとめ)。そこに行きたかった祖母の理由は、このとき母親にも叔父さんにももちろん樵にもわからなかった。

外海は観光ガイドブックに載るようなところではないが、樵はその海で泳いでいるうちに、不思議なものを見る。そして、気が付いたときには目が見えなくなっていた。原因不明のまま家で療養する樵のもとへ留守番に来てくれた桐一伯父さんから絵本を読んでもらう。みえない目に絵本の絵がみえてくる。それは、長崎で体験した世界と酷似していた。

見えていることが全て真実ではないかもしれない、見えないから事実ではないと誰が言い切ることが出来るだろうか。一番大事なことは、「みえない」のではないだろうか。

精霊流し、原爆の落ちた浦上天主堂、原爆の資料……つぎからつぎへと見聞きすることは、樵にとっては衝撃的なことであった。さらに外海への途中で立ち寄った歴史民俗資料館に架かった26人のクリシタンが処刑される絵を見ての檜二叔父さんの言葉だ。「26人の使徒は、罪を犯したわけではない。キリストを、神を信じたから豊臣秀吉の命により処刑された。どんな理由にせよ秀吉も秀吉の命に従った人たちをまちがっていなかったとはいえない。」

「信じるもの」を持つ人間は強い。しかし、その信じるものは、全ての人にとって「みえる」もの「きこえる」もの…「真実」であるとは限らない。また、信じるものは、同一でもないだろう。九日間の見えない療養の間、桐一伯父さんの言葉・音から恐竜の鱗や、愛する人等自分と「絆」のあるものを想像して「みる」ことができた。

長谷川集平は、絵本作家である。その作家が挿絵を太田大八に頼み、自分は言葉をつかってそれまで自分が絵を通して物語ったことを材料として、人として大事にすることについて物語っているように思えました。意外に子どものほうが、はやく「みえる」ようになるのかもしれないと感じた。

児童書に分類されている本の中に大人が読んでも読みごたえのあるものもあります。読書会の前に長谷川集平さんの「なまの声」で話を聴いていたのも偶然でしょうが、この本を読むことにプラスになりました。



久しぶりの児童書です。とても心にやさしいです。作者の長崎に対する思いが、文章のほしげに表現されています。内容は奥深いものが隠されています。さがしてください。



児童文学書より大人の絵本でした。作者本人に講演会でお会いして思いを伝えたいという心を強く感じました。「トリゴラス」とか「うろこ」がひんぱんに出てきます。最後の聖書のことばから見えないものを見ることに焦点をあてていることがわかる。



児童文学の世界だけでなく、その時代的话题を世の中に発し、人に知らせたいと思い色々のジャンルで表している人だと思いました。

◆ 11月課題本 ◆  
『からくりからくさ』  
梨木 香歩／著 新潮社

百丈の織物を織るように、根気が要る読書であった。特に前半は、登場人物の紹介が饒舌に続く。たまたま下宿人や持ち主として古い家に住み合わせた4人の女性が、お互いを尊重しながら各自の道を歩む姿が描かれている。4人と共に同居のテーブルにつく人形の「りかさん」が、黙って5人目の役を引き受けているのがこの長い物語織りの特徴なのだろう。

古い庭の草花から織り始めて、ところどころに大きな模様が入る。蛇の話、竜の話、人形師の話、トルコの話など。そして織り上がって機から外される時には、遠い親戚どうしであったり、出産で親子になったりと、血縁のつながりをいくつか重ねて仕上がっている。人形の「りかさん」も、持ち主達の過去を背負っていた。曲線や渦巻きなどがからみあいながら続いていく唐草模様のイメージが浮き上がる。

こうして織りあげてきた最後の部分を見れば、日常を生き抜くために人がアイデンティティをよりどころにしていること、生きた証、生きてきた証を強くもとめていることを語っている。アイデンティティをそれぞれの人の〈深い淵の底に流れている水脈〉と日本語に置き換え、その地下水は、〈すべての底で深く淵をなしながら滔々と流れゆく川〉となり、ひとつに繋がっていくことを示唆している。一人一人の生きてきた証は、混じらない唐草模様のように蔦はその人のみの閉じられたものではあるが、すべての底には繋がっている地下水脈があり感応しあう事ができるという思いなのだろうか。模様の唐草が解(ほど)けていく世界を饒舌に語る。



登場は4人ですが・・・この4人にからまる人々が多く、話が複雑になっています。

タイトルがすべてを表現しています。唐草のようにからまって、と切れることなく伝説は伝わるものだと実感しました。



からくりは人形 からくさは染 からつけた題かなと思った。

誰かが、何かが壮大な機を織り続けている。人生は、“変化が起きるときは、犠牲が要るんですわ”という言葉が心にしみた。



物語は唐草模様のように入り組んだ内容で、盛り沢山。読書会で先生が「この本自体が織物のよう」とおっしゃったことに、とても納得しました。

複雑に繋がりがあい、絡みあっている登場人物たちの関係。

私たちもまた、計り知れない繋がりの中で、生きているのだと想像できます。そして私たちの生もまた、横糸であり、織物の一部なのだと思います。

では縦糸は何か。しっかりと張られている縦糸は？

それはきっと、紀久という女性が言うように

「生きて生活していればそれだけで何かが伝わっていく」

そのもののように思います。

先生は「日常とははっきりとした形で見えるものではなく、つかめないもの。伝えたいものではなく、伝えようと思っていなくても、伝わっていつてしまうもの」とおっしゃいました。(私の解釈が間違っていなければ…)

紀久が言います。

「私はいつか、人は何かを探すために生きるんだといいましたね。でも、本当はそうじゃなかった。

人はきっと、日常を生き抜くために生まれるのです。

そしてそのことを伝えるために」

日常とは、何となくすぎていくものではなく、「生き抜く」もの。

その考え方が新鮮でもあり、それでいて納得できる、と感じました。

「生き抜く」という表現が、日々の日常を生きる困難さを感じさせてくれるからです。そして日常の中の苦しみは、地獄の釜の蓋のように常に足元にあると、この本は言っています。

「紀久の今生を越えたところで発生しているとしたか思えないその地獄への親和力で蓋は開けられようとし、その地獄を知悉しているとしたか思えない激しい嫌悪感がそれを開けさせまいとする。そしてその闘いの行方を、どちらに与することというのでもなく、じっと窺っているものがある」

そのような日常を生き抜いていくために、手仕事は助けとなります。人はその蓋を開けまいと、機を織ったのです。

「日常の鬱積をとんとんと宥め、整え落ち着かせる営みとして一心不乱に機を織っていたのかもしれない」

日常は、伝わっていつてしまうもの。そして生き抜くもの。

読書会后、自分の日常を、ふと振り返ってしまいました。



## 「根源にながれるものを探る」

「作家の伝えたいことを理解する。」ことは、10月の読書会でも話題になりました。今回の課題本『からくりからくさ』でも同様に作者の伝えたいことが、話題になりました。梨木さんの場合この『からくりからくさ』から『りかさん』『西の魔女が死んだ』などの作品に繋がりのある事柄や同じ意味を持つ言葉、同じ表現の言葉があります。一つの作品を通して「ああそうだったのか」と洞察できたとき、そのことが他の作品にも通じていると垣間見えた時は「想像の翼」（先の連続ドラマではキーワードでしたが）をひろげ時間や空間を自由に飛び回れた「たのしさ」を感じます。この至福の時は、読書会で一冊の本を中心に、それぞれの「ああそうだったのか」を出し合うことでよりのしいものが出るように思います。この本を「好き」と言う人もいれば「どっちかっていうと好きではない」と一人一人の話を絡めながら「竹の音」読書会の「からくさもよう」ができていくのです。今月も然りです。

亡くなった祖母の家で三人の友人と共同生活を始めた蓉子。蓉子は染色を志している。紬を織る紀久。テキスタイルの図案研究をしている与希子。そして異邦人であるマーガレットは鍼灸の勉強に来日していた。そして、もう一人の重要な登場人物は祖母から蓉子がもらった市松人形の「りかさん」だ。共同生活を始めたそれぞれは「手仕事」を通して絡み合っていく。また自分の「水源」にも目を向けながら、糸を紡ぎ、染め、縦糸に横糸を絡めながら布を織りあげていく。あれこれと蔓が絡み合う様に物語られていき最後は祖母から受け継いだ家が炎上する。燃え上がる炎の中で、蓉子や紀久、与希子達それぞれの「水源」を自覚できたように思える。

梨木香歩氏のこの作品における「伝えたいこと」を質問した文章を読んだことがあります。発言の内容は「言いたいことを言っただけです。」のまとめであったように思います。私は彼女の伝えたいことは十分表現されていると思います。



な本が紹介されたか、来月楽しみです。その場では声による抑揚や強弱、表情などでその人の想いの深さを感じとれますが、文字化されたものはその部分を通り抜けたもう一つの深さがあるように思います。

今回の楽しみは雪のおかげ(?)でもうひとつ別の楽しさにもなりました。

参加できなくなることを予測していた訳ではないのですが、短い感想を書いて提出していましたので文書で参加させていただきました。通常の読書会もこのような参加のしかたもあるのではないのでしょうか。先日、某国営放送の番組で読書人口が減ることについての番組がありました。その時のゲストは立花隆さんで、最後に「読むだけではなく、書かなければ」と結ばれました。立花隆氏の読書の広さ、深さを知ってはいましたが、その人からも「書く」ことの重要性を聴くことが出来ました。今回のことからこの番組のことを思い出しました。

「竹の音」は、「読み・語り・そして書く」ことを大切にしている会だと思えます。この会に参加させていただき感謝です。そして、この会がこれからも続いて行くように願っています。



## 今年の一冊

### 『泣いてもいい?』

グレン・リングトゥヴィズ/作, シャロツテ・パーディ/絵, 田辺 欧/訳

「死神さん、どうしておばあちゃんを連れていっちゃうの?」 大好きなおばあちゃんが連れて行かれないように、4人の子どもたちはいっしょうけんめいです…。子どもものやさしい気持ちに寄りそって、生と死を考える絵本。…TRCMARC 内容紹介より

死について描かれた絵本です。

死神が明日の朝までに大好きなおばあちゃんを連れて行っちゃう…連れて行かれないようにするにはどうしたらいいの? 4人の子どもたちはいっしょうけんめいに考えます。

この本の中で死神が言ったことば

「もし死ぬことがなかったら、生きているということは大事なことはなくなるんだよ。

雨の日がなかったら、お日さまをありがたく思うこともない。夜がなかったら、朝が早くきてほしいと思うこともない」

生と死だけじゃなく他のことにも置き換えられると思いました。

影があるから日なた(光)がある。私のことで言うならば、今までなんとなく思い通りに人生が進んできましたが、こういうふうに進めるように誰かの助けや犠牲があったのではないか。

自分のことだけじゃなく、それを支えてくれる物事、人々のことも考えなくちゃいけないな…と思う一冊になりました。



『酔狂に生きる』

曾野 綾子／著 河出書房新社 2014.07

人間は自由で破格な生き方ができる。自由は楽しいが怖い。自由は容易に攻撃される。それを承知で自由を取った者が真に解放された人生を知る一。「酔狂」な人生を送ることを選んだ曾野綾子が語る生き方の極意。

『奇跡の人』

原田 マハ／著 双葉社 2014.10

時は明治、青森県弘前。「盲目で、耳が聞こえず、口も利けない」少女のため、アメリカ帰りの旧幕臣の娘・安が教育係として招かれた。ふたりは苦難の道をゆく…。『小説推理』掲載を単行本化。

『評伝月形潔 北海道を拓いた福岡藩士』

棧 比呂子／著 海鳥社 2014.09

幕末明治を生きた福岡藩士、月形潔。樺戸集治監の初代典獄として北海道開拓の命を受け、囚徒と共に原生林を開墾し「月形村」を誕生させるまでの苦難の道のりなど、時代の荒波に揉まれながらも我が道を進んだ人生を辿る。

『1億総自己ベストの時代 人生の仕事の見つけ方』

高橋 佳子／著 三宝出版 2013.12

人生の仕事＝ミッションワーク。それは、「私はこのために生まれてきた」と思えるほどの充実感をもたらし、想像を超えた力を1人ひとりの中から引き出す。5人の真実の物語と共に、ミッションワークの探し方を解説する。

『孤独の力』

五木 寛之／著 東京書籍 2014.09

今、生きるためにもっとも必要なもの。それは孤独の力である一。時代と環境のせいで、幼年期から自然に孤独の中で育ってきた五木寛之の渾身の語り下ろしに、堀田善衛との「方丈記」についての貴重な対話を併録。

『京セラフィロソフィ』

盛 和夫／著 サンマーク出版 2014.06

京セラの創業者が、真摯に仕事や経営にあたり、人生を生きていく中から生まれた考え方「京セラフィロソフィ」をコンパクトにまとめ、解説する。著者が主宰する経営塾「盛和塾」において行った講話記録を編集。

『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス／著 小尾 芙佐／訳 早川書房 1989.04

精神薄弱の陽気な青年チャーリーが人工的に知能を高める人体実験の被験者になり、やがて彼の知能は超天才の域に達していく。同じ実験を受けた白ネズミのアルジャーノンに彼の見たものは…。



### 『白蓮れんれん』

林 真理子／著 中央公論社 1994.10

あまりに名高い「白蓮事件」。姦通罪のあった大正十年の人妻の恋の逃避行は命がけであった。天皇の従兄妹で華族で炭鉱王の妻、相手は若い熱血の社会主義の闘士。衝撃的なニュースを小説化。ひとすじに貫いた真実の恋の物語。

### 『四十八人目の忠臣』

諸田 玲子／著 毎日新聞社 2011.10

愛する磯貝十郎左衛門と浪士たちのため、討ち入りを影から助け、その後、浪士の遺族の赦免、赤穂浅野家再興のため将軍家に近づいた実在の女性を主人公に描く、新・忠臣蔵。『毎日新聞』連載を単行本化。

### 『櫛挽道守』

木内 昇／著 集英社 2013.12

幕末、木曾山中。父の背を追い、少女は職人を目指す。家族とはなにか。女の幸せはどこにあるのか…。一心に歩いた道の先に、深く静かな感動が広がる長編時代小説。『集英社WEB文芸レンザブロー』連載を単行本化。

櫛を挽く事に一念を通した女の人の物語です  
父の仕事に「ほこり」を持ち技を受けついで娘です  
長編ですが是非？読んでみてください



### 『神と人間との間』

鶴飼信成/著 弘文堂 1966

40年間に読んだ気持・感じと、40年後に読んだ今の気持ちのずれ、長く生きる  
とずるくなるのでしょうか。しかし、つい最近亡くなった熱心なクリスチャンの方を  
思う時、信仰の強さを垣間見ることが出来る。



### 『きんぎょの夢』

向田 邦子／原作 文芸春秋 1997,08

おでん屋を経営する砂子には、結婚してもいいと思っている男がいる。ある日、店に見知らぬ女がやってきて一婚期を逸した女のはかない夢を描いた表題作の他、結婚をめぐっての親と子の心の行き違いをテーマにした「母の贈物」と、子のない老夫婦の哀歎を優しく見つめた「糸の指輪」の計三篇を収録。向田ドラマの小説化第4弾。

(「BOOK」データベースより)

婚期を逸した女の人の物語三編

私みたいな人の主人公に興味をもってよみます。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◆  
『もの食う人びと』

辺見 庸／著 共同通信社,1994.06

バングラデシュで、旧ユーゴで、ソマリアで、チェルノブイリで…人びとはいま、なにを食べ、考えているか。世界の飢餓線上を彷徨い、ともに食らい、語らい、鮮やかに紡いだ、驚愕と感動のドラマ。世紀末の食の黙示録。

『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス／著、小尾 芙佐／訳 早川書房 1989.04

精神薄弱の陽気な青年チャーリーが人工的に知能を高める人体実験の被験者になり、やがて彼の知能は超天才の域に達していく。同じ実験を受けた白ネズミのアルジャーノンに彼の見たものは…。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◆  
『くじけないで』

柴田 トヨ／著 飛鳥新社 2010.03

「人生、いつだってこれから」 98歳の詩人、トヨさんがつむぎ出すみずみずしい言葉の数々。『産経新聞』の連載「朝の詩」に掲載された35点を中心に、平成15年から平成22年までの作品を集めた処女詩集。

『百歳』

柴田 トヨ／著 飛鳥新社 2010.03

世界の何処かで 今も 戦争が起こっている 日本の何処かで いじめも起きている やさしさの インフルエンザが 流行しないかしら 思いやりの症状が まんえんすればいい (「流行」より) 随筆等も収録した 第2詩集。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◆  
『西の魔女が死んだ』

梨木 香歩／著 楡出版 1994.04

中学校に入ったばかりのまいは、学校へ行けなくなった。そして田舎のおばあちゃんのところへ行くことになった。畑や林、川や緑の山に囲まれて過す日々、何よりもおばあちゃんとの生活が楽しいまいであったが、「西の魔女」とはだれだろうか？

### 『アイリーンといっしょに』

テレル・ハリス・ドゥーガン／著，宇野 葉子／訳 ポプラ社 2012.09

自分の人生を楽しんできたテレルが、いつも優先するのはアイリーンの幸せ…。知的障がい者の妹アイリーンが生まれてから60年余りの歳月を、ユーモアを交えて描く。

### 『ぼくの脳を返して ロボトミー手術に翻弄されたある少年の物語』

ハワード・ダリー／著，チャールズ・フレミング／著，平林 祥／訳 WAVE出版 2009.11

やんちゃな少年だったハワードは、養母によって“悪魔の手術”ロボトミーを受けさせられた。彼は54歳になったとき、医学界の恥ずべき歴史の1ページを暴き出すことになる。力強くも感動的な生き様を描いた生存者の物語。



### 『自閉症の僕が跳びはねる理由』

東田 直樹 /著 エスコアール出版部 2007.02

自閉症の人の独特の話し方はどうして？ すぐに返事をしないのはなぜ？ 自閉症の子どもは多くは自分の気持ちを表現する手段を持ちません。自閉の世界は、みんなから見れば謎だらけ。自閉症の著者が綴る、自閉症の人の心の中。

「筆談」というコミュニケーション方法を手に入れることで自分の言葉をわかってもらえるようになった自閉症の中学生、東田直樹さんの著書です。文字言語を通して自分の心の内が語られている。プロローグでは、「この本を通して僕らの自閉の世界を旅してみてください。」と呼びかけている。

### 『言葉の誕生を科学する』

小川洋子・岡ノ谷一夫／著 河出ブックス 2011.04

人間が“言葉”を生み出した謎に、科学はどこまで迫れるのか？ 鳥のさえずり、クジラの鳴き声など、言葉の原型をもとめて人類以前に遡り、小説家・小川洋子と科学者・岡ノ谷一夫が、言語誕生の瞬間を探る。

小川洋子『ことり』を読む中で紹介された本である。上記の音声言語ではコミュニケーションできぬ自閉症。しかし言葉は、〈求愛の歌〉が進化の過程で「歌」から「言葉」へ大いなる飛躍をとげたようである。言葉と心の起源をたどる興味ある著書である。

### 『リトルターン』

ブルック・ニューマン／作 五木寛之／訳 集英社 2001.11

ぼくは飛べなくなった鳥。すべては失われた。今までの生き方は残っていない。ぼくは、もう鳥じゃないの？ 仲間たちとはなれて、ぼくのひとりぼっちの旅が始まった…。現代に新しく飛び立つリトルターン(コアジサシ)の物語

『カモメのジョナサン』が左脳で書かれた物語ならこれは右脳で書かれた寓話であると訳者の五木寛之が語っている。主人公のアジサシは、何か不思議な理由から本来持っていた飛ぶという能力を失ってしまう。この難局をどう切り抜けたか、奇妙な旅について物語られる。現代を「とべなくなった時代」と捉え、今を生きるリトルターン（アジサシ）に勇気を与えてくれるかもしれない。



### 『むかし・あけぼの』

田辺 聖子／著 角川書店 1983.6

美しいばかりでなく朗らかで伶俐、しかも文学的才能もゆたか、という類まれな女主人・定子中宮に仕えての宮中ぐらしは、今まで家にひきこもり、渴き喘いでいた清少納言の心をいっきに潤して余りあった。男も女も、粹も不粹も、典雅も俗悪も、そこにはすべてのものがあつた。「心ときめきするもの」など、小さな身のまわりの品、事象を捉えて書きつけた『枕草子』。そこには、共に過ごし、話に興じた、細やかな情趣を解してくれた中宮への憧憬と敬慕、中宮をとりまく花やかな後宮の色と匂いと笑い声を、千年ののちまで伝えたいと願う清少納言の夢が息づいている。平安の才女・清少納言の綴った随想を、千年を経て、今清少納言・田辺聖子が物語る、愛の大長編小説。（「BOOK」データベースより）

◆ 1月課題本 ◆  
『人生に定年なし』  
津本 陽／著 光文社

約15年前、この作品が雑誌に連載されていたときは、「わが人生に定年なし」だったそう  
だ。一冊の本にするとき「わが」をはずして「人生に」になった。あまり変わったことではないよ  
うなものの、なんとなくわだかまりを覚える。

「私の人生」に定年はないと「私が」いうのは、そのままだと思う。それというのも、「定年」とい  
う言葉は、企業が人と雇用関係を結んでいる中で出てくる言葉のはずだからだ。

「定年」は、雇用契約があるから生まれる言葉なのだから、人生などという契約でも何でもな  
いものに使えるはずがない。「人生には定年がない」ということが一つの見解として通用して  
いるのは、「定年」という言葉が持っているある種の、停滞、終止、離脱、満了、などの気分を  
援用しているからだろう。人生に、そのようなものはないという当たり前のことを言うところで、  
このテーマは働いている。

この作品の内容になっているこれまでの暮らしは、同じ時代を生きた人には共感できるか  
もしれないが、万人共通というわけではない。それでも、その中から抽出できるものは何かと  
いうことで例会の話は進んだ。「楽観的」「強い」「相対的な見方」「諦年」などという言葉も挙  
がった。

帰る間際に話したのは、確かに定年はないのだが、「人生」とはどこまでを言うのかとい  
うことだった。肉体の終了を意味するのなら、息を引き取ったところで「人生の定年」となる。し  
かし、それでは生きている間に蒔いた種がどこかで生き続けるのは、どう考えるのかとい  
うことになる。肉体は終了しても、残した言葉や思想は止まらないで知られなくても続いているか  
もしれない。まさに「我が人生に停年なし」ではあるまいか。そんな話をしながら別れた。



自分自身が歩んだ人生を思い出しながら興味深く読むことが出来た。

特に「サラリーマン時代」については、会社社会を退いて5年余ということもあり懐かしく感じ  
た。

我々「団塊の世代」は「戦後70年の歩み」等に書かれているように、日本の経済復興のため  
「企業戦士」ともてはやされ、高度成長期の流れの中で仕事一筋に走り続けた。

世界と肩を並べる「成熟期」に「定年退職」と言われ、「第二の人生」という新しいステージが与えられた。しかし、「人間は実につまらないもので、いつ死ぬか予見できない」と書かれていたとおりで、この世に「生」を受けた瞬間から、予見のできない「逝く」ことへの道が示されており、これから何に向かって歩めばいいのかなと考える時間を過ごした。

「人生に定年なし」の小説内容と違うかもしれないが、今まで歩んできた過去を振り返り迷い考えて、次のステージに進むことが「人生に定年なし」と言えるのではないかと思った。

これからは、地域社会の中で、過去に培った知識・経験により、一日一日を大切に丁寧に過ごしていくことにしている。



年が改まり初めての読書会でした。準備されたテーブル、椅子には空席なし。本日参加できない人もありましたが、読書会のことを耳にして、初めての参加者もあり、なにかと明るい雰囲気スタートした「竹の音」読書会でした。

課題本を読んで語り合うことで、読みが深まること、別の読み取りができることが、読書会のおもしろさのひとつです。作品そのものは、一人読みの段階ではあまり「おもしろい」とは、思いませんでした。ですが、感想文を書いている今は、少し違っています。語り合うことで「読めてくる」「見えてくる」面白さを感じています。

今回の課題本のキーワードは、＜定年＞です。今回も図書館からのリファレンスのひとつとしてこの＜定年＞というキーワードに関する資料もあった。＜定年制＞という社会通念上の定年についての資料である。そこからみても定年とは、個人あるいは会社等との契約が存在することを意味しているが、＜人生に定年なし＞とは、単に社会通念上のことでもなく、それぞれの人生に定年はないといっているのである。（別に取り立てて言うことでもなく、当たり前じゃないかと、この本のおもしろさは、会の最初の頃は、感じられないでいました。）

講師の先生から「定年」について参加者の受け止めを尋ねられた。専業主婦の人もいれば、会社員だった人、公務員だった人等々、定年を迎えたけれど続けて仕事をしている人…それぞれが「定年」の捉え方が違っている。語句の「定義」の違いは、それぞれのバックボーンの違いでもある。津本氏もさまざまな生き方を「定年」という箍をはめてながめているところに作家のものの見方があった。そこに着眼するところはまさに「ものかき」である。しかも巧みなことばの遣い方や表現がありました。育った環境や地域がその人をつくることも否めない。津本氏が育った地にある歴史や生活がバックボーンとなりものの見方や思想をつくりだしているのではないだろうか。各章に様々な「生」があるが大か小か、苦か楽か二元的に考える相対の世界はしんどく絶対に頼りたくなるものですが、絶対世界に生きていないのが津本氏ではないだろうか。時代小説を書くとき真剣で藁等を斬る体験をすることで文章に著す件などである。また、津本氏の生地、和歌山の雑賀崎や雑賀衆の話や親鸞の辞世の句の話など愉しくひろがっていった。ひょっとするとこれは、絶対世界に生きていない津本氏の読者へのしかけだったのか？

「別の作品でも読んでみようか。」という気持ちにさせるのが読書会です。今回もそのような気持ちになりました。文書で参加された方もあり、またひろがりました。皆さんに感謝。



作者は頭が良くて楽天的であり、どんな時も、自分の信念をもって小説を通して人生を謳歌していると思った。



物事には表と裏、両方の面がある。捉え方を変えることで淡々と強く生きていけるのだと教えられた。運の悪い事や自分の力ではどうしようもない事に出逢っても、受け取り方を転換して楽天的に生きていけると勇気づけられた。



男目線のエッセイ。戦争時代の男の人のきびしい生き方がうかがえます。今の若い男の人によんでほしいです。私の父の時代がよくわかりました。

◆ 2月課題本 ◆

『さくら道』

中村 儀朋／著 光文社

桜を話題にするにはまだ早い2月の例会。だがそれは、桜の美しさを花を基準にして言うからであって、桜にしてみれば、春も、四季の中の一つに過ぎぬだろう。そう思いつつも、道沿いにある桜の枝を近寄せてしげしげと眺めた。今日はまだ花の始まりを見せるものは何もなかった。

副題に「太平洋と日本海を桜で結ぼう」とつけられたこの作品の内容は、ずっと以前に新聞記事で読んだ覚えがあるし、その数年後、車で御母衣ダムの近くを通り、「ああこれがあの庄川桜なのか」と思ったことを記憶している。沿道に桜を植える人があったとも聞いていた。その人物が桜に心を寄せた佐藤良二という人だったとこの作品で知った。さらに、共鳴した多くの仲間がうけついだことも知ることができた。

作品の基になったのは、残された良二さんの4000ページの日記や手記。36歳から亡くなる直前まで書かれていたそうだ。この本は、題こそ『さくら道』だが、桜を植え続けて「さくらの道」になったという話だけではない。国鉄バスの車掌をし、環境に恵まれない子ども達を喜ばせ、桜を運んで植え続けたその思いを、〈自分を捨てれば何でもできる〉〈俺は俺の道を行こう〉〈他人のために力をつくす〉と心に決めて歩んだ「佐藤良二の道」の始終だ。父親の言葉や生きざまに導かれ、武者小路実篤に示唆を与えられ、桜を生き甲斐として我が身に結実させた。〈花を見る心がひとつになって、人々が仲良く暮らせるように〉それがこの桜守の夢だった。

〈桜は誰が植えてもいいんです。誰かが植えておくから素晴らしい桜の森、桜の並木道ができてくる。無名の桜守、無名の桜であっていいんじゃないか。植えておけば、誰かがあとでみてたのしむことができる。〉樹木研究家の小林義雄氏が良二さんの心持ちについて語られた一節が、鮮烈だ。だが同時に、〈山の自然は美しいというても、これは、なかなかのことで美しいのやおへん。〉(水上勉 作『櫻守』より)その美しさの裏側にある「なかなかのこと」を、この作品から読み取ることができる。良二さんの妻を主人公にして物語れば、どのような作品になるだろうかと思ってしまった。

「奈良東大寺のお水取りの前に、若狭のお寺でお水送りの法要がある。二月堂の井戸まで水脈が繋がっているという信仰があつてのことだ。今、若狭湾に14の原発が立ち並ぶ。若狭湾から都会へ、水の道ならぬ電気の道が再開される。電気を待つ都の人をよこばせたい

一。水上勉は、鄙の側の真心を「若狭の奉仕力」と呼んだ。原発の是非を口にするときには、このことを忘れるなど言いたかったのかもしれない」（2015.2.7中国新聞「天風録」要約）

高浜原発3、4号機が規制基準に適合し、福島の大震災以来途絶えていた再稼働を見越しての記事なのだが、「電気の道」について「若狭の奉仕力」という言い方が、佐藤さんの歩んだ「さくら道」に重なって響いてきた。鄙の人の「奉仕力」は、光も影もまとっている。



日本の花と言えば桜とすぐに思います。桜を植えて人に見てほしいと思い、それを実現し半ばで命果て残念なことでした。その花が咲き人が見てきれいと声に出してくれたことで亡くなった人もうれしいことでしょう。



良二さんは、自己犠牲のひとことにつきる人でした。

父親が苦勞して育ててくれた思い出や感謝の気持ち、自分より人を喜ばせたい気持ちが、さくらをうえる原動力になっています。

地元の自然の風土、美しさに感動して生活をされていたので、自然とのふれあいが、良二さんの人格にも強いカルチャーショックを与えています。

自己犠牲って、まず自分の生活や体調がある程度整ってからするような気がするけど、良二さんは貧乏と重い病気、苦痛とつきあいながらしているのには、感心しました。

今の人は富を増やしてアンチエイジングに一生懸命なのに、良二さんは自分のそういうことより、人を喜ばせたいという志をつらぬいて、すばらしいと思います。



「人とともに生きる」とは

「太平洋と日本海を桜で結ぼう」この本には、このような副題がついています。日本人の象徴である「桜」を「名鉄線」に沿って植えることで太平洋と日本海を結んだ人がいるのなら、読書会は、「本」が人を繋いでいるといえるのではないのでしょうか。しかも一冊の本を通して参加者の数だけ捉え方があります。桜の一本一本にそれぞれの美しさがあり、全体としての美しさもあるように。

読み取ったことをアウトプットすることのおもしろさ、楽しさを今回も愉しませてもらうことが出来ました。

桜は、その美しさや散り方の潔さ等から日本を象徴する花とされている。平安時代の頃から「花」といえば桜を意味するようになった。冬に山に帰った山の神様は、春に里に下りてきて桜に宿り豊作を願ってたくさんの花をつけると聞いたことがある。確かに県北の「山田（やまだ）」のそばには山桜を（大島桜や河津桜）見ることが出来る。広島県の桜の古木の一樹として知られている庄原市東城町の千鳥の桜は、水をはった田圃にその姿を映して凜として

立っている。またその木の根元には、神様を祀る祠がある。「桜信仰」が身近にあることを今回の課題本や関連本を通して改めて感じることが出来た。

水没予定地にあった老桜の移植は、ダム建設ということがなければ起きなかったことであろう。ダム建設計画がなかったら、世間の多くの人が知らぬまま枯れていた桜かもしれない。何というめぐりあわせだろうか。難しい桜の古木の移植は、ダムに沈む村からそこにあった「命」を次の時代へ繋ぐための象徴的できごとであった。そしてこの巨木の移植が成功した昭和36年、この巨木と出会った佐藤良二さんの日記には、人生の目的を「人を喜ばせること」と記し、人を喜ばせるために選んだ行動が、桜の苗を植える事であった。命を繋いだ「御母衣の河津桜」の古木からひろい育てた苗もあった。ただひたすら人の喜びのために桜を植える。個人や家族の幸福だけに満足するのではなく……。

人が人とともに生きていくことを喜びとすることが希薄となっている。そのような時なぜか世の中に自然災害が起きている。もちろん偶然ではあるが、「啓示」にも感ぜられる。4年前の東北、そして今年の広島土砂災害。これも生きる中での「であい」である。そのことをどう受け止めるかが生き方・生きる姿勢の違いとなるのであろう。友人が「対岸(太田川を挟んだ土砂災害の地の)を車で走りながら胸が締め付けられ涙が出たことをそのすぐ後に会った人(その近くに日常がある人)と話したが、あまり感じてないことにあきれてしまった。」と話していたことを思い出した。「武者小路氏は、経済的には不自由のないなかでの白樺派」と考えるのは、まだ人とともに生きていくことに「経済力」を抜きに考えられない自分がいるのです。しかし、天の啓示のなかで人との繋がりや繋がっていくことの大切さを想う気持ちはしっかりと持っている(つもりかも?)。結果として相手を意識して人とともに生きて自分が思えるような生き方でありたいとは願っている。

◆ 3月課題本 ◆

『ことり』

小川 洋子／著 朝日新聞出版

先月の課題本だった『さくら道』の中で、主人公の父親が、鳥の鳴き方の話をする。〈オジイー、オジイー。ポッポオー、ポッポオー。フヤァー、フヤァー。ホッチョカケタカ、カケタカ、カケタカ。デン助ベン助ハリツケヨ…。ボロキテ、ホーコシヨ、ボロキテ、ホーコシヨと鳴くんやぜ〉と書かれている。鳥の鳴き声は、国や地域や人によって色々に聞こえるようで、暮らしの中にいくつかの声常駐している。『ことり』というタイトルから、生物としての小鳥をまず思い描いてしまった。

作者が、小鳥のことを書きたかったのかどうかを知る前に、横町に散歩をした。神経生態学を専門とする科学者の岡ノ谷一夫氏と『ことり』の作者小川洋子氏が対談する『言葉の誕生を科学する』[2011 河出書房新社]という本には、ちょっと横町に入り込んだような感じの楽しさがある。同じく岡ノ谷一夫氏の『言葉はなぜ生まれたのか』[2010 文藝春秋]も、横町滞在が長引くような魅力がある。共に、作品『ことり』(2012)に大きく影響していると考えられる。

科学者の研究は人間の知識を刺激しておもしろい。そして、小説が成り立つのは、実証不可能な「人間のこころ」の問題を主とする。岡ノ谷氏は科学者として科学的に「言葉」に迫ろうとし、小川氏は、小説家として「ポーポー語」を登場させ、見えない世界につき進もうとする。小説は、誰でも同じ条件なら同じ答が出てくるというものではなく、それぞれ特異世界を描く。だからリアリティーはないとも言えるのに、筆力によって、特異なはずの中に普遍のリアリティーを感じるからおもしろいのだ。

「ポーポー語」は誰にでもわかる一般的言語ではない。〈小鳥の小父さん〉とその兄だけが理解できる空間を意味し、実社会的には狭いけれども、「こころ」という見えない世界を自由自在に生きている日々を描いていく。この自由自在さが、読み手の共感を得るか、反発を招くか、それは本を読み取る読み手の自由である。つまり、読み手が根拠にする自分の自由という判断基準を照らしているものでもある。照らされて、考えてみようかと思ったとき、読書会は格好の場となる。

読書会はミラーボールのようなものである。小川洋子氏の投げかけを反射して、飛び交う言葉がさまざまな光になって手元へ届いてくるからである。



～こえなきこえを聴く～

暖かい日差しがさしこむ読書会の部屋には、課題本『ことり』に関連する本がテーブルの中央や壁際の長机にも沢山集められていました。一冊の本を読み進めるうちに今まで読んだ本と繋がることがあります。同一作家の別の作品であったり、より深めるための本であったりします。課題本を基に様々な方向へひろがるおもしろさがあります。そして今日は、「小鳥」の鳴き声に耳を傾けることから始まりました。

〈さえずりは、小鳥の歌でありことばです。〉——『言葉はなぜ生まれたのか』より

テープから流れる鳥のさえずりに耳を傾けながら、この鳴き声を人間の言葉に置き換える遊び——「聞きなし」を思いだした。先月の『さくら道』でも「ぼろ着て奉公」と、フクロウの鳴き声が「聞きなし」で表現してあったことを思いだす。今日の読書会のなかでも「一筆啓上……(ホオジロ)」や「てっぺんかけたか(ホトギス)」「法、法華経(ウグイス)」などの「聞きなし」を聞いた。鳥と同じように身近に居る小動物の鳴き声は、残念ながら「聞きなし」にする方法を知らないし、聞いたこともない。ひょっとしたら、『ことり』のお兄さんのように、人間が今の言葉を獲得するまでに小鳥と同じような言葉を喋っていたのかもしれない

〈ああ、そうか、と弟はつぶやいた。お兄さんも小鳥と同じように皆が忘れた言葉を喋っているのか。——『ことり』より〉

現在自分が遣っている言葉が「言葉」として通用しているのは、ごくごく限られた部分でしかない。ひょっとしたら人も鳥も共通に話せる「ことば」を共有していたのかもしれない。さえずりは音楽であり、癒しでもある。音楽が永遠であるのはこのことからいえる。しかし、今社会に流れている言葉は、癒しには程遠いものがある。本来「言葉」は、「言の端」「言の葉」とあらわされ「言」と「事」の両方の意味を含んでいた。社会に通用する言葉とは、万人に理解されるものでなければならないと同時に、永遠のもの(音楽)でなければならないはずだ。しかし、現在は両方の意味合いを兼ね備えた「言葉」が流布されていない場面が多い。そんな中での「お兄さん」は、社会にあっては異端者として見られたであろう。小鳥のおじさんは、お兄さんの声をきくことができた一人だ。

「小鳥のおじさんやお兄さんは、不幸だったのか。」の問いかけがあった。

この兄弟の行動は、誰に迷惑をかけるものではないが、現代の社会では、なかなか受け入れられないのではないだろうか。であるならば、この人たちは不幸だったのか。幸か不幸は、社会に受け入れられることではなく「その人らしく生きる事」ではないだろうか。それを許さぬものがあるならば、そのものこそが不幸なのではないか。社会に受け入れられるか否かで判断する事こそが、そもそも間違っているのではないかと、考える。読書会で語り合うなかでは、「こえなきこえを聴く」ことが少しだけできたように思っている。それはひょっとするとあの時間だけの「華麗なる誤解」かもしれないが……。



とても心豊かにしてくれる本です。小川洋子さん独特の世界感がくり広げられています。兄弟が心をひとつにして生きていく様子にホッとするものがあります。是非読んでみてください。



ことりの言葉がわかる兄と弟の心あたたまる物語の本です。

人間相手ではなく少し変わった兄弟なので心のことばがわかるのでしょう。

いろんなことを感じさせられる作者です。



小鳥のさえずり、光と風、ラジオの音、クラシックの曲、ゲストハウスの接客室、庭のバラ、図書館の司書の声、鈴虫、言葉の障害でひきこもりがちな人が日々の出会い、くらしの営みの中でたくさんの楽しみを味わっている。

毎週買いに行くあめ玉のお菓子も。

でも、1人勝手な楽しい生活だけでなく、ことりの小父さんは、小鳥や出会う人の声をきいてその本質や願いを知りかねてあげたい気持ちでいっぱいです。

今、自分のお願いごとや、自分を売り込むことに熱心で人のことには関心を示さない人が多い。人の気持ちに耳をすませるような生活は日常の生活を豊かにしていくと思う



『ことり』を読み終えた時、私はお兄さんや小父さんの生き方はなんて幸せなのだろうと思いました。

ポーポー語を話すお兄さんと小父さんの、社会から閉じられた世界。二人は狭い空間、ごく限られた人間関係の中で生きています。でも内側の世界は、広く、深く、慈愛に満ちていて、とても豊かです。人の言葉では言い表すことができないほど豊かな世界は、他人に理解してもらうのも難しい世界でもあります。外に閉じているからこそ、内が豊かで広いのでしょうか?その豊かで、静かな生活が、私には何だか羨ましくて仕方ありません。

ひとに丁寧に扱われたモノは、同じモノでも、温もりのような空気を帯びているように感じる場合があります。

この物語もそんな気配があります。『ことり』を読んでいると、小川洋子さんが言葉一つ一つ、丁寧に選び出して、優しくそっと置かれていると感じます。だから読む私もその気配を壊さぬように、そっと両手で包んで読みたいと思ってしまいます。そして言葉で書かれているけれど、言葉のいない世界が書かれています。言葉のない世界も、こんなにも豊かで、美しい。

この物語がとても好きですが、どこがどう好きなのか、何だかうまく言い表すこ

とができません。無理に言葉を紡げば、想いは形を変え、別のものへと変貌してしまいそうです。言葉は時に不自由な道具です。

最後の、静かに亡くなっていく小父さんのシーンを読むと、どうしても冒頭のシーンを読みたくなります。そのまままたはじめに戻って、読み進んで…エンドレスなお話です。ゆっくりとまた、『ことり』の世界に浸ろうと思います。